



TITLE:

人文 第8号

AUTHOR(S):

---

CITATION:

人文 第8号. 人文 1973, 8: 1-41

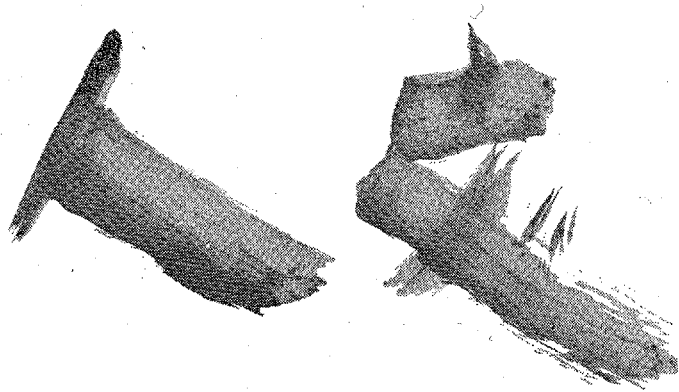
ISSUE DATE:

1973

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57134>

RIGHT:



## 第八号

訪 中 報 告



1973

京都大学人文科学研究所



# 人 文 第 八 号・訪中報告

1973年9月

## も く じ

はじめに ..... 2

団長挨拶 ..... 4

代表団の質問と北京大学の回答 ..... 島田 虔次 6

### 訪中報告会

団長あいさつ ..... 河野 健二 10

革命と歴史 ..... 林屋辰三郎 11

中国の博物館・考古学遺蹟を見て ..... 林 巳奈夫 18

中国の婦人解放運動 ..... 小野 和子 23

周口店と西安 ..... 井上 清 30

道教一元論者の弁 ..... 福永 光司 34

訪中日誌 ..... 上山 春平 38

参観箇所一覧 ..... 41

北京大学への贈呈書・北京大学よりの受贈書 ..... 9

中国側接待関係の方たち ..... 28

## はじめに

この号は、当研究所を代表して、この春、中国に派遣された代表团（正式の名称は「京都大学人文科学研究所学術友好代表团」）の、訪中報告の特集号としていただきました。

かねてから井上清教授を通じて交渉を進めていた訪中団の派遣が、北京大学の招請という形で本決りとなったのは、今年の一月下旬のことで、一月二十五日の所員会の承認をへて、八人のメンバーを決定し、その後の所員会において、代表団の任務、学術交流の基本方針などについて討議をかさねました。

代表団が京都を発ったのは三月二十四日、帰ったのは四月二十五日、その間一カ月の日程のうちで、一週間が北京滞在に当てられ、学術交流にかんする北京大学との意見の交換、学術報告、座談会などが行なわれました。

そのときの学術報告や座談会の要旨をこの特集にのせることができなかったのは残念ですが、北京大学の歓迎レセプションにおける団長挨拶と、同大学との学術交流にかんする討議において双方から提出された意見の要旨（副団長のメモ）を収録することにいたしました。

御存じの通り、帰任後までもない五月十七日に、当研究所分館の隣のイタリア



会館で、代表団の訪中報告会が開かれ、福永・上山団員によるスライド解説、林屋・林・小野団員による講演が行なわれたのですが、そのときの講演の記録が、この特集の大きな部分を占めています。

こうした次第で、この特集には、北京での団長挨拶と副団長のメモ、帰任報告会での林屋・林・小野三団員の講演記録が収められるはこびになったわけですが、八名全員の登場をたてまゑとして、井上・福永両団員には、それぞれ個性ゆたかな訪中所感を執筆していただき、残る一団員には、報告会でのスライド解説に代るものとして、訪中日誌の執筆を命じました。

さいごに、訪中特集のために一号をさくことを快く承諾下さって、とりわけ暑かったこの夏に御奮闘いただいた「人文」編集委員の方々に、心からの謝意を表したいと存じます。

(訪中団資料委員)

### 代表 団 員

|     |                  |     |               |
|-----|------------------|-----|---------------|
| 団 長 | 河 野 健 二 (所長・西洋部) | 団 員 | 福 永 光 司 (東方部) |
| 副団長 | 島 田 虔 次 (東方部)    | 〃   | 林 巳 奈 夫 (東方部) |
| 秘書長 | 井 上 清 (日本部)      | 〃   | 小 野 和 子 (東方部) |
| 団 員 | 林 屋 辰 三 郎 (日本部)  | 〃   | 上 山 春 平 (西洋部) |



## 团长挨拶

三月三十一日夜

北京大学招宴



私たちは、このたび、北京大学の御招きをうけ、京都大学人文科学研究所を公式に代表して、貴国を訪問し、いまここに、みなさまと親しく御目にかかり、日中両国人民の友好と学術交流を深める機会を得たことを、衷心から感謝し、且つ大いに喜んでおります。

私たちが、今日この喜びを持つことができたのは、北京大学および貴国学術文化界の関係諸方面の非常な御好意によるものであるとともに、一九七二年九月、日中両国間の国交が正常化され、両国の平和共存の大きな展望が開かれたことを基礎とするものであります。

いまだ事くわしく申し上げるまでもなく、わが国と貴国は一衣帯水の隣国であり、二千年以上の友好の伝統を持っております。そして、日本の学術文化の発

展はいかに多くを貴国に負うてきたことでしょう。

然るに、明治維新の後、わが国の為政者は中国に対して非友好的政策を採りはじめ、ことに一八九四―九五の日清戦争以来、五十年の久しきにわたって侵略の企てを追求してきました。そして一九四五年、軍国主義日本が打ち破られた後も、なお、わが国の政府は、ただちに中国人民との真の友好を回復せず、わが国と中華人民共和国との国交樹立を二十年以上も引き伸ばしてきました。

私たちは自国政府のこのような政策を早く止めさせることができなかったことを深く恥じております。その前提に立って、一九七二年九月、ようやく日中両国の国交が正常化されたことを、熱烈に慶祝するものです。国交正常化によって二千年の友好の伝統は再生の第一歩を踏みだしました。私たちはこの道をさらにいっそう大きく前進することを決意しております。

この決意は、今ここにいる私たち八人だけのものではなく、京都大学人文科学研究所全員のものでもあります。すなわち、私たち訪中代表団が編成されるに当り、人文科学研究所は、全所員的一致で、次の三つの点を確認致しました。

(一)本研究所は、代表団を中華人民共和国に派遣するに当り、一九七二年九月二九日の日中両国政府共同声

明の精神を指針とする。右の共同声明において、日本側は過去の戦争責任を反省しているが、われわれもその反省を深める。とくに、本研究所の前身である東方文化学院京都研究所は、一九〇〇年、日本をふくむ八カ国連合軍が義和団の反帝闘争を鎮圧した時以来、日本政府が中国から奪いつづけたいわゆる「賠償金」によって一九二九年に創設され、維持されたものであること、および人文科学研究所の中国文化に関する「學術調査」、その他一部の研究活動が、客観的には、日中戦争その他の日本の軍事行動につながるものであったこと、これらの点を深く反省する。

(二) 本研究所は、台湾省は中華人民共和国の領土の不可分の一部分であることを確認し、いわゆる台湾「政府」の諸機関との関係はいつさい持たない。

(三) 本研究所は、日中両国政府共同声明第六項の諸原則に従い、両国間の恒久的な平和友好関係を、學術面において強化發展させる。

人文科学研究所所員会は以上の点を確認するとともに、現在研究所が所有している「永楽大典」第六六五、第六六六巻の原本の複製を貴国に御送りし受け取っていただくよう希望しました。その理由は次の通りであります。一九〇〇年帝國主義連合軍が北京を攻撃したさい、「永楽大典」の残本の大部分を各国軍が略奪し

または散佚させたことは、列席の諸先生の熟知せられていることと存じます。記録によれば、私どもの研究所の所蔵本はその時のものとは断定できないようであります。その複製本を持参することによって、以上のべました研究所創設の由来を反省する私たちの気持ちの一端を表したいのであります。

もちろん、私たちは、この原本のみならず、日本人が中国から不当に持ち去った文化財を御返しすることができるよう広汎な日本人民と共に努力しなければなりません。が、さしあたり、私たちが今すぐできることとして、右のようなことを考えました。私たちの微衷を御汲み取りただければ大変幸せに存じます。

日中両国家と両国人民との新しい原則に立った友好の發展は、たんに両国人民の幸福に寄与するだけでなく、アジア太平洋地域と世界の人民の幸福に大きく貢献するものと信じます。私たちは、學術文化の仕事を通じて、この偉大な事業に参加する光榮にあずかりたいと念願しております。ことに日本の學術文化の將來の發展にとって、貴国との學術交流のもつ意義は真に巨大なものと確信します。またこの交流を通じて、日本の學術文化界が、いくらかなりとも貴国の學術・文化界の御役に立つならば、私どもの喜びはこれに勝るものではありません。

## 代表団の質問と

## 北京大学の回答

島田虔次

われわれが北京大学に対して提出した質問は、左の十一カ条（むしろ十カ条）である。

一、北京大学における改革（文革後のいわゆる教育革命）の状況。

二、北大の、但し人文科学（社会科学をふくむ）系の教官の姓名、担当課目もしくは講義題目。

三、北大の人文科学系の出版物（定期刊行物、研究報告、編纂書など）。

四、北大に寄贈したわが研究所の出版物はすべて到着しているかどうか。それらに対する忌憚なき批判をお聞かせ願いたい。

五、わが研究所と北大とのあいだでの人的交流の可能性、および条件について。当然のことながらこの交流は相互的なものでなければならぬ。

六、右とは別に短期間の参観団の可能性について。

七、中国近代史、古代（近代以前）史、考古学研究などにおける交流の必要性について。但し、史というのは狭く歴史学という場合の史ではない。

八、これは質問というのではないが、わが研究所の東洋学文献センターについての説明を挿む。

九、北大における日本研究の状況。

十、おなじく西洋研究の状況。

十一、日本の学界、とくに中国研究、に対する批判を承りたい。

これらの質問要項はあらかじめ提出しておいたほか、四月二日、はじめて北京大学を訪問した際、北大革命委員会副主任黄辛白氏をはじめ関係諸教授のまゝで私より逐条説明し、四月四日夜おなじような顔ぶれでの席で黄氏より詳細な回答があった。私のノートによると、その要旨は次の如くである。なるべくノートのまゝに記すことにする。

一昨日の貴団の話はわれわれの希望でもある。交流に積極的態度をとることは、中国の利益でもある。両国間には、差異のみでなく共通点もある。北大としては皆さんの提議に歓迎の意を表する。われわれの方からいうと、計画的に、一步一步進めてゆきたい。少数から多数へ、短期から長期へという風に。



一九七〇年に募集した第一期生は、いま三年生でまだ卒業していない。目下、北大は改革の最中である。多くの力を教育の制度、内容などの改革に注いでいる。この改革は最後は必ず成功する。然し曲折はあるであろう。この点、日本の友人たちの諒解を得られることと思う。

二 研究の面でも改革中である。ただ、その面は教学のばあいにくらべると弱い。交流という考のもとに発展させたいと思っている。交流を計画的にやるということとは、双方の要求の上に立って行いたい。わが国の事情でいうと、交流は外交関係または文教関係で行われる。いまのばあい、文教方面の組織が一緒になって努力したい。あるときは学校（北大）の方から提案して方方と相談したい。その場合でも、政府の文教部門の意向をきく必要がある。そこで最後の統一されるのである。以前、社会主義国の留学生を受け入れていた。またA A諸国や資本主義国よりも、そうしていた。それも政府の統一的計画のもとに行った。要するにわれわれの交流は積極的に、計画的に、一步一步おこないたいということである。人員の交流、物的な交換、いづれもそうである。

一、北大は外国からの留学生を受け入れる準備、また中国から送り出す準備をしている。厳密に言えば、

既にそうしているのである。朝鮮、ベトナム、アメリカ、カナダ、ラオス五カ国、計数十名を現に受け入れている。また、イギリス、フランス、パキスタンに留学生を送っている。形勢人を推す、という言葉がある。形勢人に逼る、形勢人を促す、ともいう。まさしくそういう情勢である。然しやはり準備の仕事はスピードアップしてやるべきである。留学生交換拡大の計画の中に、日本、京都のことは必ず考慮するであろう。それで専門科目、人数、期間などを具体的に出してもらいたい。人文科学のみでなく、語学、自然科学にも拡げる必要がある。語学のばあいは少し早く受け入れることができるであろう。また、こちらからも京大人文へ出したい。自費か、公費か、両国間の協定によるかその辺のことは今のところはっきりしない。

二、教師の交流については、少数の人なら考慮してよろしい。研究してみたい。こちらから行くのは単に北大のみでなく、ことによると他大学からも行くことになるかも知れない。愛知大学代表团も来るらしい。大阪市大も希望している由である。提案は北大よりするが、最後の許可は上級機関が行うのである。（按ずるに、この(二)は質問書にいわゆる代表団参観団について、日本全体として計画的であってほしいということであろう）。

三、研究者の交流。中国の大学は教育の場所であり、革命の接班人を養成するところである。然し同時に研究の場所でもある。学校―系―教学研究室という形になっている。教研室は教学指導と科学研究の指導に当る。また独立の研究所をも設けている。文革以後、社会科学方面の研究所の整理を考えている。日本の研究者が来て講演することを歓迎する。中国からも行きたい。こういうことも、以前は日中友好協会（正統）がやっていた。井上清先生の実力はわれわれもよく承知している。今日、国交回復の現状では、政府水準、民間水準、いろいろ考えられる。

四、資料の交流。従来京大よりいろいろ書物を送って下さったことを感謝する。図書館でしらべてみたら人文研のものが最も多かった。ブルジョワ新聞が文革中中国では資料などすべて焼いたといっている。デマにすぎない。いま大図書館を建てている。いま書物は三百万冊、将来これが五百万冊になるものとして作っている。文革中、二派に分れて武闘したことはあったが、然し書物保存という点では共通であった。希望として今後とも交換をつづけることをのぞむ。ただ、こちらから送れるものが少い点は、改めたい。それは出版物が少いのである。いま社会科学、自然科学の学報を準備している。出版になり次第、送る。数年来もつ

とも努力しているのは、教材（教科書）の編写である。これは、おいそれと出来るものではない。例えば李家寬同志が話した世界史の教材の場合などがそれである。階級闘争の観点が必要である。またヨーロッパ中心の観念を打破しなくてはならない。然しそのあと、いかに書くべきか、一步ごとに意見の対立がおこる。此は前進の正常な状態である。書き上げた教材は甚だ多いが、ただし、出版ということになると問題がある。学生は文革前の二分の一だが、教材印刷費は文革前よりぐっと増えている。然し出版できるものは少い。半製品が多い。だから送っていない。然し必ず沢山出版する日がくるにちがいない。科学研究も段段すすみ、出版して送れる日もきつと来ると思う。

最後に、团长よりつたえられた京大総長からの北大代表団招聘の御意向に対して深く感謝する。どうか感謝の気持ちを総長に御伝え頂きたい。代表団を送るときに連絡する。ただ、校内のことが忙しいし、各国よりの来訪者も多い。我国の指導機関に提出して指示を仰ぎたく思っている。

質問要項のうち、(一)については別に李家寬氏より詳細な解説がすでにあったので触れられていないし、(二)は、いまその用意がないということであった。(四)につ

いては、未到着のものが一、二あり、その書名も秘書長まで通知された。(九)出は、四月二日午後の分科懇談会が回答の機会となると考えられたのであろう。質問要項のうちわれわれがもっとも重要と考えているのが人的交流の一事であることは、あらかじめ説明し

てあったので、回答も専らその点をめぐって行なわれたのである。具体的ことは、勿論これからの問題であるが、帰国以来、東大部においてはしばしば部会を開いて検討をかさね、物的交流の面では既に新しい具体案を決定した。(七月十三日記)

## 北京大学への贈呈書

永楽大典(巻六六五—六六六) 残二巻 京都大

学人文科学研究所 景印本

七經孟子考文底稿 景片五葉 日本山井鼎稿

雲岡石窟 全十六巻 水野清一・長広敏雄共著

京都大学人文科学研究所研究報告 一九五一

一九五五

京都大学人文科学研究所漢籍分類目録 付書名

人名通檢 全三冊 京都大学人文科学研究所

一九六三

白氏文集二冊 平岡武夫・今井清校定 京都大

学人文科学研究所研究報告 一九七二、七三

大正期の政治と社会 井上清 岩波書店 一九

六九

大正期の急進的自由主義 井上清・渡部徹 東

洋経済新報社 一九七一

世界史のなかの明治維新 坂田吉雄・吉田光邦

京都大学人文科学研究所研究報告 一九七三

ルソー論集 桑原武夫編 岩波書店 一九七〇  
世界資本主義の歴史構造 河野健二・飯沼二郎  
岩波書店 一九七〇

## 北京大学からの受贈書

毛主席詩詞三十七首 北京人民出版社 一九六

五年

魯迅詩稿 上海人民出版社 一九六〇年

魯迅手稿選集 北京文物出版社 一九六〇年

魯迅手稿選集統編 北京文物出版社 一九六三

年

魯迅日記 上海出版公司 一九五一年 再版

文化大革命期間出土文物 第一輯 北京文物出

版社 一九七二年 2部2冊

西漢帛画 北京文物出版社 一九七二年 2部

2冊

春到鳳凰嶺 北京石油化工總廠會戰工地寫作組

北京人民出版社 一九七二年 2部2冊

哲學史上的先驗論 北京大学哲學系哲學史組編

北京人民出版社 一九七二年 2部2冊

歐洲哲學史簡編 汪子嵩等編著 北京人民出版社 一九七二年 2部2冊

唐虞王右軍家書集 北京文物出版社 一九五九

年

晉人書度尚曹娥誄辭 北京文物出版社 一九六

一年

宋歐陽修詩文手稿 北京文無出版社 一九五九

年

宋司馬光通鑑稿 北京文物出版社 一九六一年

宋朱熹書翰文稿 北京文物出版社 一九六一年

資治通鑑 北京中華書局 一九五六年

史記 北京中華書局 一九五九年

漢書 北京中華書局 一九六二年

后漢書 北京中華書局 一九六五年

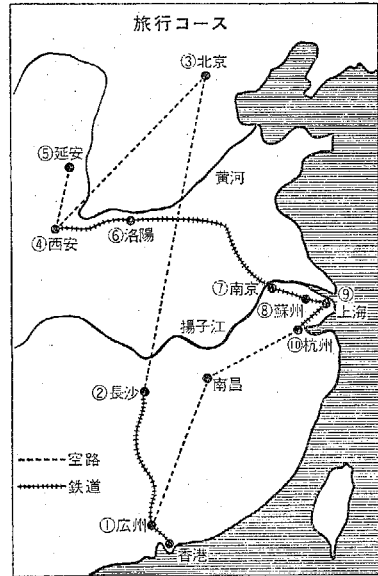
三國志 北京中華書局 一九五九年

陳書 北京中華書局 一九六二年

周書 北京中華書局 一九七一年

南齊書 北京中華書局 一九七二年

鸚鵡形陶器蓋 北京大學



## 訪中報告会

一九七三年 五月一七日  
於 イタリア 会館

# 団長挨拶

河野 健 二

私どもは三月末から四月の末にかけて、学術友好代表団ということで、国立大学としては最初の訪中団というものを組織しまして中国を訪問して参りました。団員は八名で十個所の都市を回り、約九十の場所を見学しました。

私どもの訪問に対して中国側が非常に歓迎をし歓迎いただいたことをまず申上げたいと存じます。

つぎに、訪中に当って私どもは三つの希望をもっていたことを御報告しておきます。その一つは、中国の大学・研究機関を訪問して今後の学術交流について協議を遂げたいということが一つであります。

第二点は、中国の歴史上の遺跡や博物館、あるいは出土品の展示場などを参観し、見学を通じて、各人の研究活動に役立てたいということでもあります。

第三番目は、現代の中国社会というものを实地にこの目で見て、中国革命、それから中国の社会主義建設というものについての認識を深めたいというのが団員全部の希望でした。

これらの私どもの希望に対して中国側は非常に配慮をしてくれまして、私どもの当初の希望のほとんどすべてを満たすことができたということでもあります。

それからもう一つ申し上げたいことは、今回は北京大学が私たちを招待して下さったわけですが、しかしその後には北京大学だけでなく中国の政府および中国科学院、さらに全国の大学が緊密な連絡をとった上で、私どもを迎えて下さったということです。したがってまた、私どもを媒介として日本の学術界全体、すなわち日本の大学その他の研究教育機関、あるいは学会や学術団体など、そういうものとの交流を深める方法や手順について相談したいという態度が、非常にはっきり見られたということです。私どもは人文科学研究所という立場、あるいは京都大学という立場だけではなく、日本の政府ならびに研究者に対して私どもの見聞を報告し、今後の日中両国の文化交流の推進のために努力する必要があると感じております。

私どもが中国を訪問しました時点で、「人民日報」という中国の代表的な新聞が三回にわたって私どものことを記事にしました。まず第一は私どもが中国に到着したということ、第二番目は、郭沫若・廖承志氏の二人が私どもを歓迎するレセプションをして下さったということ、第三番目は、北京から中国各地の見学に出発したということ、いずれも相当大きなスペースを割いて一度は写真入りで報道されました。そういうこともあって、中国のどの土地を訪問しても世話役の方々は私どものことを非常によく知っておられ、またそれだけに歓迎を受けたわけです。中国における一カ月間は、私どもは大変な名士としての待遇を受けました。一生のうちおそらく二度とはそういう目に遭うことはないだろうと、私は中国各地の賓館の最上等の部屋に泊まりながら考えたものです。私どもは微力ですが、いつの日か中国の研究者の方々を日本にお迎えして、私どもが受けたのと同じような待遇はもちろん無理としても、せめてそれに近いおもてなしができるようになることを心から念願している次第でございます。

## 革命と歴史

林屋辰三郎

いま司会者のほうからお話がありましたように、訪中報告を申し上げると、それは三十日間にわたるお話なので、きりなく続いていくのですが、特に「革命と歴史」というたいへん莊重なテー

マを与えていただきましたから、そういうところにしぼってお話をして、もっと細かなことは、これからあとスライドによりましてご報告をしていただくということになっております。

いま団長、「親愛なる団長」と中国でよばれていました河野先生が、今度の旅行の目的として三つの点をお挙げになりました。学術の交流ということと、それから遺跡や文物を見学してくるということ、それから第三には、現代の中国を見てわれわれの認識を深めようという、この三つの目的を私たちは持つて行ったのでございます。

学術交流の点は特に北京大学を中心といたしまして、数回にわたって会談や、あるいは講学というような形でいたしました。そのほか大学といたしましては、西安の西北大学、南京大学、上海の復旦大学、そうした大学も訪問をして学術交流をやったのですが、北京大学での会談の要約は、こちらからいろいろ申し入れたことに對しての回答として、積極的にやりましょう、それから計画的に、一步一步やりましょうという、こういうことに集約されるでしょう。私どもの旅行中も、積極的に、計画的に、一步一步というこの三つのことは常に念頭を離れませんでしたし、また今後もこれはたいへんいい要約なので、いろんな場所で応用できるんじゃないだろうかと思いました。

目的の第二の点と第三の点を合わせると、だいたい革命と歴史という、そういうテーマになるのでございます。お手元にいただいた旅程がいておきますように、今度のプランでは、広州・長沙・北京・西安・延安・洛陽・南京・蘇州・上海・杭州と、そういう十の都会を回り、九十箇所を參觀したのでございます。このプラ



望 遠 山 韶 沙 長

ンは、私どものほうで当初どういふところを見学したいかということをし入れまして、それに対して北京大学のほうでそれに適応したところのプランをつくって下さって、それを提示された。それを私どもまた若干の要望を入れてつくるといふ形で、プランの作成の段階から中国のほうでは非常によく考えて、わたしたちの多くの希望を三十日の日程の中に盛り込めるようにつくって下さいました。私どもははじめ成都へ行きたいなどと申ししておりましたが、これはやはり遠くて無理だろうということでありました。それからまた私どもは姑蘇城外寒山寺の鐘の聲に魅せられておりますので、ぜひ蘇州を入れてほしいという要望をあから入れましたら、それは快く入れていただくというような形で、相互にお話し合いをしながらかつくり上げたわけですが、私はこのお手元についておりますプランは、現在一カ月の中国旅行としては最高の、また至上のプランではないだろうかというふうに考えます。

特に最初に北京へ入りますまでに広州、広州はどうしても入口ですから通るのでございますが、広州と長沙、この二つの都会を

訪問いたしまして、特に長沙では韶山という毛主席の故郷などもその中に含めて、二つの都市を見学いたしました。これはやはり中国というものの対する最初の認識を、北京に入るまでに一応の概念としてつかむということにたいへん役立ったと思います。その他いろんな点で配慮の行きとどいた苦心のプランではないかというふうに思います。

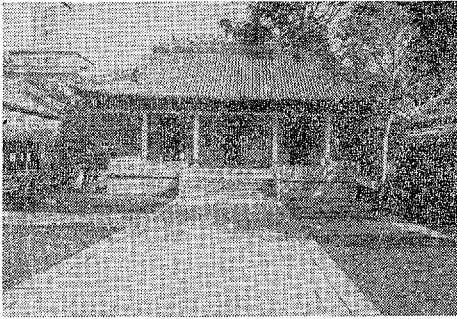
私どもやはり最初入国いたしましたときには、革命の国に入っただという緊張を禁じえませんでした。たいへん身の引きしまるような気持ちで深圳という国境を渡りました。そして広州へ入りましたが、広州ではまず駅頭に暖い歓迎を受け、そしてまた、広州も長沙もそうですが、ちょうど季節がよくて、美しい花がいっぱい咲いて、広州では紫荆花、紫色の小さな花、それから木綿花という朱色のモクレンのような花が非常に美しく咲いておりました。これは日本では見ることのできない非常に変わった花でございますが、そういう花に迎えられるで最初に広州へ入った。

第一の参観地といえますのは、私は第一に参観する場所はどこかということに非常に関心をもっており、おそらく革命的な場所へ案内されるだろうと思っておりましたところが、蘭園というお庭へ連れていかけてもらいました。そこには「蘭、香を生じて路に満つ」という額がかかっておりまして、いかにもそれは中国の国花である蘭の花によってわれわれが迎えられ、そして行く手いっぱいにはその香りが満ちておるといふような、自分勝手な解釈ですが、これがわれわれのために案内してもらった最初の参観地であります。

そういうところを見えていきますと、最初の緊張はだんだんはぐ

れてくる。そういう案内のしかたが実にうまいんですね。これは驚くべきもので、各都市とも非常に深い行き届いた態度がとられた。

最初の参観地を申し上げたついでに最後の参観地を申し上げますと、私もは一カ月間旅行して、最後はまた飛行機で広州へ帰ってきたのですが、同じ広州で今度は広州交易市を見せていただきました。これが最後の参観になるのですが、そこでは現代中国の工業的な、あるいは農業的な生産の全体系が展示されておる。ですから最後のいわば総括というような形で交易市を見せていただいて、もう一度中国についての認識を整理するという形になりました。こういう点でも、蘭の香りから入って、活発な交易市で



広州農民運動講習所

終わるプランというのは、全体として一つの壮大な芸術品みたいなものであります。

最初にも申しましたけれども、私も最初の広州とか長沙というのは非常に感銘が深かったのですが、農民運動講習所というところが広州にはございます。ちょうど国共合作のときにきてまして、一九二六年に毛主席が三十二歳の若さ

でこの講習所で農民運動の講義をした、そういう場所でございますが、そのすぐ隣には付属の陳列館があって、非常に立派に整ったものです。そのように史跡というものがありませんと、必ずそれに付随して陳列館を設定して、詳しくその内容について、あるいはその前後についての説明をするというのが、だいたい史跡の紹介の形になっているのでございます。その陳列館の頂上には「星火燎原」という炎の形をしたマークのついた塔が立っております。ここで点ぜられたところの星のような一つの火が中国全土に燎原の火のように広がったということを説明しておる。蘭の庭を見たそのあとで農民講習所を見る、そこで中国のいわば革命というものの中の一つの初現と、その大きな広がりを見せてもらおう。

私もはその農民講習所でそうしたことには圧倒されて見ておりましたが、この農民講習所の建物がなんとなく由緒ありげで、屋根などに清朝風の裝飾などがございましてたずねてみますと、それはかつての孔子廟であつたと説明されました。そうして孔子廟に伴うところの泮池という池などもそのまま残されておりますし、そういった孔子廟が農民講習所として利用され、そしてそこでそのまま当時の講習所の当時のままに復元されておるといふ場所でございます。私もそうした孔子廟というものを頭に置いて、それが革命運動の最初のいわば星火の点ぜられた場所であるということを見ると、そこには中国の革命というものに対しての一種の安堵感といえますか、私個人としては非常に親しみやすいという印象を持ったのであります。

もう一つそれが進みまして、広州起義烈士陵園といまして、広州で義を起した烈士の墓地がございまして、その墓地が遊園地

に現在なっている。非常にこれは壮大な、その烈士の中には朝鮮の人たちもおりますし、それからまた外国の人たちもいる。そういう人たちもいっしょにそこで祭られておる。そういう大きな規模の陵园であります。そこは現在全く遊園地になっておる。革命烈士の墓にこれからお参りするといふふう言われて、少し襟を正さなければいかんのかなと思つて行きますと、そこは非常になごやかな、家族連れや恋人同士があちこちに遊んでおる。ボートを漕いだりなんかして池で遊んでおります。そういうところに、その人たちの顔の中に、私はやはり烈士への感謝を見ることができるといふかというふうに思いました。

その遊園地で私はもう一つ、「春風楊柳千万条、六億神州盡舜堯」という聯を見ることができました。これはあとで毛主席の詩の一節から取られたということを見ましたけれども、この六億の人民のいる国土を堯舜の世のようにしたいという毛主席の理想をそこに見ることができました。

それからまた長沙では、岳麓山という山へまいりました。ここでは毛主席が体を鍛え、またそこで国家を論じたという場所でございます。愛晚亭というところがございまして、そこへいつも毛主席が来られたということでした。岳麓山というのは南岳衡山の麓の山という意味ですが、その岳麓山というのは南岳衡山の道観が頂上にございまして、そこに白鶴井という清水が湧いておりまして、その場所ですの水を使つてお茶を皆に飲ましてくれるのです。だからいかにも仙薬を飲むような感じでした。一行の中には福永先生という道教の専門家がいらしまして——私は道教一元論などにくまれ口を言つて申し訳ないと思つておるんですけ

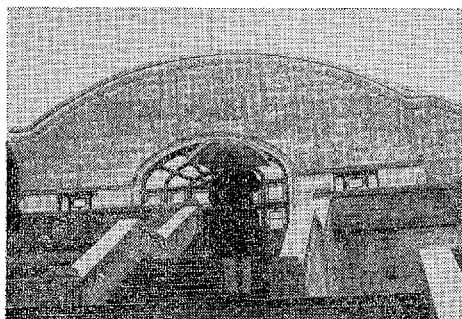
ど——いろいろと教えを受けまして、遺跡の背景に道教があるということを感ぜざるをえませんでした。

それからまた韶山へまいりますと、ここにも毛主席の旧宅と同時にそのうしろにはやはり道観がある。これは延安へまいりまして、延安は「革命的聖地」と言われているんですが、その聖地延安のシンボルは何かとたずねると、宝塔山という山を指して唐代の仏塔を示すのでございます。そういうところで私たちは、中国の革命的な遺跡の背景に歴史を感ぜざるをえなかったし、革命と歴史の問題はたいへんつながりがあるように思つたしだいです。

その場合に、これは偶然なこと、中国は古い国なんだから、革命の場所であつても歴史的な背景があるのはきまつた話であつて、それを勝手に取り出して感心しているのはたいへんおかしいという見解が当然出てくるでしょうが、私はそれはまたちよつと違ふんじゃないかと思う。それは中国のいろんな芸術品、たとえば絵がかかれたり刺繍がつくられたりいたしますが、そういう場合にも、革命の聖地延安を描けば必ず宝塔山を描く。韶山の主席の住宅を描けば必ず韶山の道観のある三角錐の形の山を描くといふふうに、現在芸術品の場合でも、いつまでもそのものをシンボリックに取り扱つているというところに、私は單なる偶然ではないように考えました。

それから第二の点は、これらの遺跡が非常に完全な形で保存されておるといふことでございます。もし孔子廟の問題についてそれほど関心がないとしたら、その復元を清代の建築の原形に、瓦にまで年号がそのまま復元して入つておりますけれども、そういう形にすることはなかっただろう。おそらくそういう革命的なも





半 坡 博 物 館

の背景についても、歴史に対する関心が大きい。すなわち岳麓山の道観もいまは廃墟みたいになってるんですけれども、せつせと復元建築の最中でございました。それからまた毛主席の住宅などにいたしましたも、百年前の家庭の民俗をそのままに復元しておる。そういうことから見ましても、いま申し上げたような問題を考えることができるんじゃないかと思えます。

そこで教えられましたのは「推陳出新」ということです。古いものを推して新しいものを出すという、そういう標語が出ておる。これはやはり古いものを積極的に推し出して、しかもその中から新しいものを引き出してくるという、毛主席の考え方を示しているんじゃないか。そうした遺跡にまいるにしても、決して過

去の古いものを利用したことは積極的に言おうとはいたしません。私どもがせんさく好きで、もとは何だったかと質問をすると、そういう形で返ってくるんですけれども、いま申し上げたように、芸術品や復元の過程でも古いものがはっきり位置づけられておるのを見ますと、私は中国の革命は歴史をことさらに強調しようとはしていません

も、決して忘れてはいないということを感じたことでございました。

それでは、いったい歴史が教育のなかには、どういうふうに反映しておるのかということを少し申し上げてみたいと思います。

中国はいまさまざまな出土文物展が示しますように、あちらこちらに発掘が進んでおります。馬王堆を一つの代表的な例といたしまして、各時代、各地方にわたり非常に多くの発掘がございますけれども、そういう遺物や遺跡が発見された場合には、これは単なる遺物や遺跡という文化財として保存するだけではなく、これをいかにして教育的に利用するかということを考えているように思われます。従って洛陽には半坡博物館といわれる原始時代の遺跡がございますけれども、そうした遺跡は大きな覆屋の中に囲いこんで、それを上から細かく参観できるような設備がつくられております。またそれから洛陽に含嘉倉という地下の貯蔵庫が発見されて、それはずいぶん深い地下十メートルぐらいのところから唐代の穀物倉庫が発見されたのですが、そうしたものの見学にいたしましても、これをただちに公開し、教育的に利用するということで、パネルであるとか地図とか、そういうものを実によく準備しております。そういう点で日本では遺物、遺跡が発見されると、これはやつかいものが見つかったというような形で受けとめられておる、そういう日本の現在の発掘を考えてみますと、これは大きな違いではないかと思いました。ことに含嘉倉の唐代の穀物倉庫は、鉄道の線路の拡張工事の間に出てきたのです。ですから約十本ぐらいの鉄道の鉄路がすぐそこまで来ておる。そこで発見された。日本だったらこんな場合どうかご想像願えると

思いますが、中国ではこれを国家的に保存しようということが決定すると、その駅全体、鉄道全体が移動してしまうのです。そうですから、そこはずっと広くなって、自由に発掘できる。こういうことは日本ではちょっと考えられない。土地が全部、国有ですから、その点では（笑）問題が違わなければならない。土地が全部、国有です。そういう姿勢がなければ、なんぼ国有地であつたてできはしないと思うんですね。鉄道の十本も線路の通つてゐる場所を動かさうなんてことは、日本だったら発掘もやめとけという話になるにきまつてゐるので、この点はやはり国全体が出土文物に取り組む姿勢がございますし、教育的に利用するという配慮がございます。

そういう中で私たちは興慶公園という、西安で唐代の玄宗皇帝のときの離宮だろと思われる興慶宮という宮殿がございますが、その遺跡が発見されたのでございます。それは勤政務本樓、略して政樓というふうに言われておる建築が発見された。そうしますと、これを保存するということに関しては問題ない、必ず保存する、しかしその方法について興慶宮の建築を完全に復元保存するという考え方も、もつと現代に役立てるような史跡公園としてこれを保存しよう。要するに興慶宮の遺跡に関連した名前などをつけた亭観と広い苑池をつくつて、そこで一つの史跡の公園をつくる。そうすればその遺跡も見、そしてまたムード的に唐代の歴史を知ることができるであらうと、そういう考え方ですね。その二つの路線が対立しかつ闘争した。

その結果としてどちらがとられたか。だいたい日本ですとこれは完全復元のほうがとられますね。だいたい学者とか研究者などなんかは、自分の研究上の関心からそのほうがいいような感じを

持つのですが、中国ではそうではなくて、民衆のための施設として史跡公園をつくる。現在そういうことで非常に大きな苑池がつくられてゐる。もと少しは苑池があつたやうですけれども、それを何倍か拡張して立派な遊園地ができ上がつております。

京都市のだいたい遺跡に対する考え方というのは、幸いに史跡公園スタイルになっております。ですからその点おそらく西安と姉妹都市になつても一致点を見出せるだらうと思ふんですけれども、しかし日本の史跡公園なんていうのはせいぜいで百坪単位に對して、これは何千、何万坪という史跡公園ですから、その点の桁がだいぶ違う。

それから出土文物ですが、到るところで歴史博物館を見ました。十ぐらい見たんでしょうか、ずいぶん見ましたけれども、そういう歴史博物館や史跡付属の陳列館で、最近の文化大革命を経た中国の歴史に對する考え方が展示という形で非常にはつきりと視覚の中に入つてくるのです。その場合には私どもはこの中国の陳列が、実際にき届いておつて、日本でも博物館をつくらうというんだあれば一度は中国へ行つて見学しなければならんのじゃないだらうかと感じたのですが、その基本の流れというのはやはりはっきり階級闘争という点で貫かれておりました。ですからその内容としては農民蜂起というような事象が時代での中心問題であり、農民の動きが非常にはつきり歴史のなかに位置づけられておりました。

しかしそれだけの血なまぐさい歴史ではないということを私ははっきり見てきました。それだけの展示であれば、非常によくわかりましたと言つて帰つてくるほかないわけですから、それ

に加えて出土文物を非常にうまくあしらっておるのです。この出土文物というものは日本ではだいたい美術として取扱われ、それをつくった王朝とか貴族とか、そういう名前が強く出てくるのですけれども、中国での展示は一貫して工人がつくったのだという考え方が全体を貫いておる。ですから非常に優れた文物というものも、王朝の讃美という形じゃなくて、その工人の労働、工人の創造力というものを積極的に示していく。そのために、非常に詳しく解説することは、文物の一々の製作過程や使用方法を非常に細かく解説することなんです。そうしますと、工人の持っていた技術がはっきりのみこめる。ですから先ほど申しました農民蜂起という一つの基本線があるけれども、その上には工人の技術というような問題をずっと展示し、且つ強調していますね。

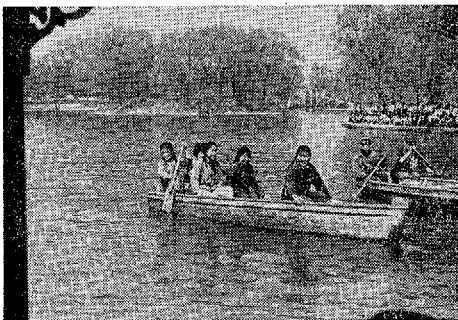
それからもう一つその上に何を持ってくるかというと、これは現在向こうの歴史研究で積極的に取り組んでおりますと云われた人物評価の問題であります。人物がそれぞれその時代を代表する形で肖像や筆蹟をかがげられて、その人物についての積極的な評価をそこに出していつてる。その人物の中には秦の始皇帝も出ますし、明の太祖もちろん出てくる。そして秦の始皇帝の解説は、秦の始皇帝という人は本をたくさん焼いたり、学者を穴埋めにしてたり、そういうこともした。しかしこの人はじめて中国を統一した人である。はじめて貨幣をつくり、度量衡をつくったというようなことが積極的に展示説明されている。それからまた学問とか芸術とか、そういう技術の人たちの紹介も非常に行き届いた形でなされておりました。朱子というような思想家の解説も、「親愛なる副団長」島田先生はまだ足りぬとおっしゃったけれども、

しかしかなりの程度には説明されております。それはいくら評価しても足りないくらいな思想家ではありませんけれども、いまの中国の中ではやはり朱子も一応評価されておるといふふうに見ていいんじゃないかと思います。

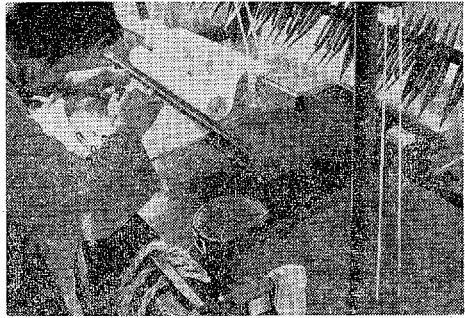
そんなわけで、歴史教育というようなものは、遺跡、遺物の教育的な配慮をはじめとして、内容についてもいま申し上げたように博物館の中での陳列の中身まで一貫して考えられているのでございます。

私も今は、そうした歴史の興味にまかせてその中に埋没していたわけじゃないんで、やはり現代中国の生産大隊も、人民公社も、トラクターの工場も、刺繍の工場も、たくさん見学いたしました。歴史史跡を見たのに比べ

るとちょっとそっちのほうの中味が少ないかもしれないけれども、これらは好みというものでしょう(笑)。だいたいいにおいて中国が農業を基礎とし、工業を主導として、新しい社会主義国家を建設するということ、そういう点での認識は十分深めることができたと思います。日本が農業を軽くみて、減反政策などをやって農



興慶公園



蘇州市刺繡研究所

地を荒廃させやがで自然を破壊するというばかりの現状を考えますと、中国の農業を基礎として工業を主導するというこのことが身にしました。そうした工場の中では、たとえば織物工場とか刺繍工場などを見学しました作品のテーマを見ますと、これはもう少し考えていいんじゃないかというふうに、これは勝手な注文ですけれども思いました。

それは現在では革命的な解放軍の姿であるとか、またその遺跡であるとか、そういうことが織物の下絵の重要な画題になっておりまして、もう少しそこに芸術的なものを追求する視点が無いんだらうかということ私は非常に惜しんで見てきました。ところが杭州の織物工場を見学した時、最後のところでたいへん心のある織物がかかっておったのです。それで私はさっそく工場の直売所である服務部へ寄ってその織物はありますかと言いました、それはありませんという答、そんなことはない、工場で見えてきた、そう言うことで、私は多少、中国語ができるということになっておりますので（笑）、どうやら通じたらしくて、向こうから出てきてくれましたのが「八駿図」という図柄のもので

ございます。そういう芸術的な図柄のものは非常に少ない。ほとんど見られませんが、これはご承知のように、清朝の康熙から乾隆ぐらいまでの間にイタリーの宣教師で中国に帰化しておりますた郎世寧という画家の作品でございます。この人は西洋画を中国に導入したという点で評価されておりますが、その「八駿図」は、彼が馬の名人なんで、なかなかすぐれたものです。そういうものを織機にかけていま織っておる最中でございます。この人の落款は「臣郎世寧恭畫」と謹嚴な文字で書くんですけれども、臣という字も恭畫という字もそのままにいま織られております。そのほか絵画には清代の新羅山人という、これは島田先生に教えていただいたんですが、華岳という画家の絵が模倣されてよく描かれております。いずれにしても織物の工場の中でこういうものがだんだん織機にかかるようになってきたということを私はたいへんうれしく思っ、「八駿図」はわが家の土産として持って帰りました（笑）。

たいへんおしゃべりばかりいたしまして、時間がちょっと超過いたしました。これで失礼いたします。（拍手）

## 中国の博物館・考古学

### 史蹟を見て

林 巳奈夫

広州では広州博物館というのがありまして、陶磁展をやってお

り、先秦時代から現代のものまで並べてありました。ここは鎮海楼という高い樓閣のような建物を利用したものです。上の階から順に下へ向かって時代が新しくなる陳列です。日程の都合であまり時間がなかったので、ほかのところをちょっと割愛して半日ここにおりまして、そこで古い時代のものを撮影しました。あのへんは前漢ぐらいの特色のある焼物があります。お墓から出たものばかりです。それと陶製の明器・明器というのはお墓に入れる模型です。こういう類も非常に特色があつて、たくさん並んでおりましたので、片はしから写真を撮つて参りました。

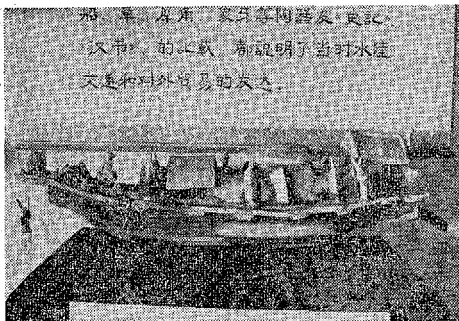
長沙では、博物館が閉まつてゐるということで、これは見られませんでした。博物館はどこにあるかというところ、馬王堆がまっすぐ東のほうに見える、ちょっとした丘の上に烈士公園というのがありまして、そこにあるとのことでした。馬王堆見学については『朝日新聞』に書きましたので省略します。

北京では、故宮の慈寧宮で行われている文化大革命中出土文物のお話をしなければなりません。『文化大革命中出土文物』の図録が出ていますが、あれに出ているものは大部分現在も見られます。しかし一部は引っこめたと言うことです。武威雷台の青銅車馬が並べられて、その部分にスペースをとられたので引っこめたのですけれど、引っこめたうちにはこのあいだ『考古学報』七二年一期に出ていました長沙の瀏城橋から出たものがないと並んでいたわけですね。しかし現在も弓とか、長い柄のついた矛などがのこされています。唐では例の西安の何家村でひとかたまり出てきた、あの一群の金銀製品。銀で鋳造した和銅開珎なども並んでおりました。例の十何歳かのこどもが書いた『論語』が出ています。

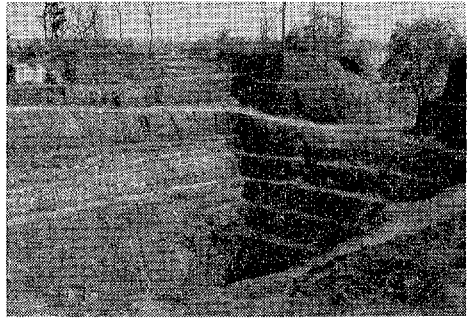
た。それからアスターナから出た絹織物。めばしいものはみんな出ています。例の山東の済南の無影山から出た雑伎、つまり整業を象つた人形など。

北京では六月の九日から日本で開かれる中国出土文物展の予展というものをやっていました。やっていたのは歴史博物館、つまり革命博物館と並んだ歴史博物館の一角でした。歴史博物館は現在準備中で来年ぐらいには開くだろうということでしたけれども、そこで日本に持ってくる出土文物もちゃんとケースに入れて一とおり並べていたのです。それをゆっくり見ることができました。日本へ来たなら混んでそんなにゆっくり見られないと思うので、だいへんありがたいことでした。

それから北京では、われわれを招請した主体である北京大学で、日本史とか哲学・経済学とか、いろいろなグループに分れ、われわれ代表団の顔ぶれに合わせてえらばれた北京大学の関係者の方々と懇談会を行ないました。その際、北京大学から考古学関係でおいでになったのはまず宿白氏、これは隋唐史の専門、それから俞偉超氏、これは



後漢陶船(広州博物館)



馬 王 堆

漢ぐらゐの専門で、それから鄒衡氏、これは殷文化の編年について書いた論文があります。それに朱德熙氏、これは古文字学の専門です。

懇談会で何を話したのか、ずいぶん長いこと話していたのですけれども、必ずしも全部覚えてるわけではありません。だいたい文革中の展覧会を見てのいろいろの感想とか感激、それについてはず

いぶんいろいろ話したり討論したりしました。たとえば滿城の漢墓から出た玉器がかなり置いてあるのですけれども、見ると前漢のもの以外に、西周の中期から後期にかけてのものと、春秋後期ぐらゐの竜の飾りとかが混ざっています。そういうった類の、昔のお墓の中から古物が出てくる、同時代でないものが出てくるというふうな話をしました。それからさっきの長沙の瀏城橋から出た弓があります。その報告を見ると、三枚の竹を合わせて作った書いてあります。実物を見ますと、弓の竹材の断面は長方形で、糸を巻いて漆で固めた漆の皮は、バラバラになりながらほうほうに残っているが、その前後の側に隙間があります。そうするとどうもあれば竹の弓じゃなくて、複合弓という、内側に牛の角

を貼り、外側に動物の韃を貼ったものではないかとも思われるのです。角と韃は、毛織物を食べる虫がかじってしまうことが非常に多いそうです。中の竹材は別に腐って縮んだりなんかしてないので、漆皮とのすき間は角や韃がなくなったのではないかと思われました。ケースの外からのぞいたのでは十分わかりませんが、宿白さんにうかがったことですが、旅順の後牧城駅、楼上、崗上墓の中国の東北の青銅器文化の遺跡があって、その報告が中国で『中国東北地方遺址発掘報告』として、北朝鮮のほうで出した報告から孫引きされています。これは中国と北朝鮮の合同の調査で、朝鮮のほうで先にそういう略報告でも出たんじゃないかということでした。

それから北京大学では講学というのをたいがい頼まれるだろうから用意しろというので、私は「奈良県高松塚古墳の発見」という、講演を用意しておきました。末永先生にお願いして分けていただいたスライドなどを見せて話をし、たいへん盛会でした。

西安では陝西省博物館というところにまいました。ここでみられるの



故 宮 慈 寧 宮



倉 嘉 含

は前からある碑林。それから彫塑芸術館。これは大きな彫刻を納めた陳列館。一九六六年に青銅器館、つまり殷周の青銅器を納めた特別の館があって、そこで青銅器がたくさん見られたのですが、今度はその青銅器館というのはなかったようです。そこにあったものも含めて歴史陳列をやっていて、西周から唐までの出土文物でもって陝西省の歴史を描くという趣向の展覧です。その中には最近発表された鄭仁泰墓から出たものとか、懿德太子墓、章懷太子墓から出たものとか、ぜひ実物を見たいと思っていたようなものが豪勢に並んでおりました。次は洛陽ですが、竜門はさっきスライドで御覧の通りです。どこの博物館も出土文物―必ずしも文化大革命中に限らない―出土文物の展覧という形で再開してるわけですけども、洛陽には労働者人民公園というのがあります、そこで洛陽市出土文物展というのをやっておりました。これは前に王城公園といった所です。昔の西周時代の周の王の住んでた都

跡を公園にしたところです。そこへ平屋の陳列室をつくりまして、そこで出土文物展をやっておりました。仰光期から唐ぐらいまでのもので、約千点ということでした。最近発表されたようなもの、たとえば西周の機瓦廠の西周時代の出土品がいっぱい出ていました。以前に発掘された、たとえば洛陽中州路の報告書に出ているような、科学院の掘った品物は殆んどそこには並んでいませんでした。それは科学院の分室に保管してあるということです。それから洛陽では隋唐の含嘉倉遺跡というものを見学しました。これは洛陽の旧城の北に鉄道の操車場があります。その操車場のどまん中にあるのです。直径一米ばかりの大きな穴が発掘され、そこへ屋根がかぶせてあります。略報告にも出ていましたが、穴を掘ったら火で焼いて、アンペラを敷いて、又カなんかを敷いて、それからまたアンペラを敷く。その中にバラ積みで粟をほうりこんだのです。底のほうの粟などが炭化して層位をなしているのを切り取った標本が陳列してありました。これは去年の暮れぐらいにでき上がったそうで、外国のお客さんは我々が初めてということでした。

それから南京。南京には博物館が二つあります。南京博物館、これは昔からあったもの。それから南京市博物館というのがある。これは知らなかったのですけれども、太平天国の東王府の跡の建物を利用したもので、入ったすぐのところは太平天国革命博物館というのを準備中でした。その奥のほうに入っていくと南京市出土文物展覧というのをやっていて、先史から明ぐらいまでが四部屋ぐらいに陳列されていました。

それから南京博物館。これは三つに分かれていて、一つは江蘇

省歴史陳列、これが一階にあります。二階が江蘇省出土文物展覧。それからもう一つ一階の端のほうで陶磁展というのをやっています。この方はとても廻るひまがなくて割愛しました。出土文物展はそう広くはないけれども、研究所の二階を二つ寄せたぐらいのかなり大きな一部屋を使っていました。歴史陳列は青蓮崗文化といった先史時代の文化からずっと新しいものまでありました。

蘇州はさっきお話があったように、はじめ日程に入っていなかったものを一日ばかり割り込んだのです。蘇州では蘇州博物館というのがあって、出土文物展をやっているそうでしたが、これはさすがに割くべき時間がなくて割愛しました。

上海は昔からある上海博物館。この二階は歴史陳列で、一階は上海市出土文物展というのをやっていました。二階は主として青銅器の陳列ですが、青銅器そのものとしてではなくて、一種の歴史陳列という形で青銅器が扱われていました。ここは馬承源氏「前に甘肅の彩陶の本を書いた人ですけれども」がだいたい陳列を担当したとのこと、この方が案内して下さいました。青銅器も一九六六年当時と比べて、だいぶいろいろ新しく蒐集されたものが目につきました。時間がなかったのでそういうものだけチェックしておいで、大急ぎで写真を撮りました。山西省の候馬市というところから春秋時代の後期から戦国ぐらいの青銅器の銡型が沢山出てきたのですが、その一部がそこに並んでいまして、はじめてその実物を見ることができて、たいへんうれしく思いました。

それから杭州ですが、この博物館は最初予定に入っていなかったのですが、開いているというのでぜひ見せてもらいたいと思ひ、

名所見物を半日割愛して私だけ行かせてもらいました。ここでは浙江省出土文物展を開催中で、月曜の休館日だったので、すっかり開けて案内して下さいました。植物性遺物が沢山出土したことで知られる呉興銭山溪の遺物が沢山並んでいました。また湖南省から江西、浙江にかけてだけにある一種の唐草風の羽根模様をつけた青銅器がありますけれども、その類で浙江省から出たものは全部並べてあって、一べんに見ることができました。それからあのへんは昔から青磁の本場なのですが、甌型の陶器の上に樓閣とか人物を配した類で非常に優秀なものが出ておりました。西晋の年号の刻まれたもの、西晋の年号碑のある墓から出てきたもので、六つばかり並んでいました。これは文化大革命中出土とありました。それからずっと新しいもので宋時代の仏像とか、印刷したお経とかいろいろ並んでいましたが、とてもそこまでゆっくり見る時間がありませんでした。

見たものはこれぐらいです。中国では、いま申しましたような出土文物展とか、歴史陳列とかいう形でこの博物館も開いているか、さもなければ来年ぐらいに開く、という情勢です。見学旅行のためには好都合な条件がすでに整っているというか、ほとんど完全に整いかけているという印象を持ちました。中国科学院考古研究所へはついに行くひまがなくて、夏鼐氏にもいろいろ用事を頼まれていたのですけれども、お目にかかれず、それだけ非常に残念だったと思います。そのほかは短い日程の中に、しかも一人だけ考古学という異質な者が入っているのに、それを都合をつけて下さり、私も勝手な希望を申し込んでもかかわらず、よく最大限にいろいろやりくりをつけていただいたと思っております。



中国の研究者の方で、日ごろ名前だけ知っていてお目にかかったことのない方々にも、いろいろお会いして意見を聞いたり討論したりする機会をすることができまして、たいへん実り多い旅行だったと思っております。見てきたおもしろい遺物もいろいろあるのですが、口で言ってもはじまらないし、それはいがいに写真に撮ってききましたので、また機会があればそういうものをお見せしたいと思っております。

## 中国の婦人解放運動

小野 和子

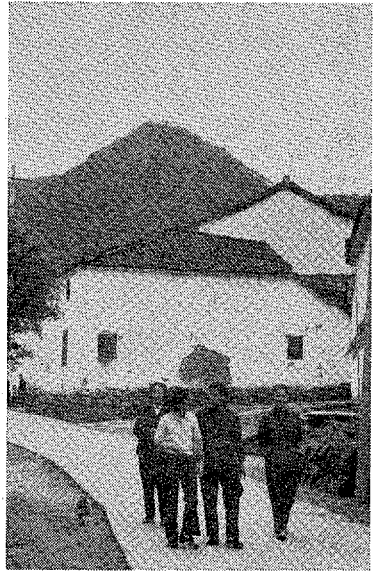
私はこの二、三年来、中国の婦人解放運動について勉強してきました。必ずしも婦人解放史が専門というわけではないんですけど、今度はいくくにも婦人解放運動史ということにいたしました。ぜひ中国の婦人解放運動についていろんなことを見聞してきたいと思ったのであります。

中国近代の婦人解放運動は、太平天国に始まります。以来百年中国ではいろんな形で婦人運動があったわけですが、その特徴は、徹頭徹尾、階級闘争の中で、階級闘争の一環として、婦人解放運動が聞われてきたということです。文化大革命の場合もそうであって、それはそれ自体としては、けっして婦人解放を目標とした革命ではなかったにもかかわらず、それが婦人解放にあって非常に大きな意味を持つ革命だったのではないか、というこ

とを私はかねがね考えてきたわけです。解放後の中国において、婦人解放の上で一番大きな事件だったのは、やはり婚姻法の施行であります。婚姻法は婚姻における男女の平等を確立したわけで、今の私どもから考えますと、婚姻の自由などは至極当然のことのように思われますけれども、中国のように封建的な家族制度というものが社会の基盤をなしていた、そういう社会の中では、これはいへんなことだったのであります。

中国の中南区だけで、婚姻法施行の当時、離婚を要求して立上った婦人たちが一万人あまり殺されたり自殺したといわれておりますけれども、結婚の自由というのはそれほど大きな、婦人にとっては命をかけてたたかいたるほどのものとしてあったわけですから、それが第一段だとすると、その次にくるのが土地改革から人民公社に至る農業集団化の過程であります。農業集団化の過程の中で、婦人たちははじめて大量に社会的な生産労働に参加しました。人民公社は農業を集団化することによって農機具工場とか水利施設とかいった公共施設をずいぶんたくさんつくっていくわけですが、けれども、そういう中で、婦人がかつて家庭の中でやってきたさまざまな家事労働、たとえば脱穀とか精米、あるいは裁縫、そういうものが社会化される条件ができます。そして、そういう家事労働の社会化によって婦人ははじめて集団的な農業労働に参加することが可能になったわけでありまして、つまり人民公社の成立というのは婦人にとっては家事労働の社会化と経済的自立という面で非常に大きな意味を持ったといえると思います。

それではそこで婦人が完全に解放されたのかと申しますと、けっしてそうではなかったのであります。今度の文化大革命で劉少



奇路線の影響下では婦人がどのように差別されてきたか、ということがいろいろ出てきております。すなわち、劉少奇路線のもとでは、女はやはり落伍したもの、役に立たないものであり、兵隊には使えても将校には使えない、そういうものとして考えられていたわけです。したがって女は家事と労働ができればよろしい、ということであったわけですが、しかし一方劉少奇のように経済主義の立場をとり、生産力の発展を第一義的に考えた場合婦人はやはり安価な労働力として非常に必要であったわけです。したがって婦人の労働力の解放はやはり必要であって、福祉が推進せられた面もあることはたしかであります。保育所とか食堂とかそういうものがあるいろいろなわけですが、しかし、それは要するに婦人の労働力を解放するためであって、そういうことがただちに婦人の人間としての解放にはつなげていかなかったのであります。

北京大学の婦人が言っておりましてけれども、劉少奇路線のもとでは階級闘争を離れ、路線の闘争を離れて、單純に婦人の保健なり福祉なりが追求された。そして工場では婦人を採用したがないとか、あるいは男女同一賃金同一労働といったそういう原則すら完全には実現されない、つまり政治的にも不平等であるし、経済的にも不平等である。そういう状況がまだ残っていたわけです。

これに対して文化大革命というのは、婦人を政治的な面で非常に大きく解放したということがいえると思います。私が延安で人民公社にまいりましたときに、革命委員会の婦女主任さんに、文化大革命で何が一番変わったでしようかということを質問いたしましたとき彼女は、それは婦人の政治的な地位が非常に大きく変わったことだと答えておりました。つまり文革というのは、思いついて大衆を立ち上げらせるということで、いままでも下積みにされてきた多くの婦人大衆を立ち上げらせて、路線の闘争の中に参加させていったわけでありました。

上海で中国共産党の九全大会の代表の方にお会いしましたけれども、その方は文革の中で婦人がどういうふうにな活動したかということを非常に生き生きと語って下さいました。この方は労働者新村、つまり新しい労働者の住宅街で婦人の活動家というふうな方ですが、婦人を組織して毛沢東思想の学習会をやるうとしたところが、さまざまな形で妨害された。女というのは新聞が読めて家事ができればそれでよろしい。毛沢東思想を学習して政治に口出しするようなどとはやめろという露骨な妨害さえあった。しかしそういう妨害の中で、労働者新村の婦人たちを組織して学習をする。さらに路線の闘争に加わっていく。ここは三千八百ぐ

らしい労働者住宅街でありますけれども、そのうち八百人ぐらゐがまだ労働に参加していなかったが、そういう闘争のなかでいままで労働に参加してなかった婦人たちが生産闘争に組織され、七つぐらゐのグループに分かれて、トランジスタラジオなんかの加工労働をやり始めた。さらに労働をやるために子どもを収容する保育所をつくる、あるいは食堂をつくり、衣服のサービスステーションをつくっていった。つまり学習と闘争を通じて路線というものをしっかり把握するということが一番肝心のことであって、それによって生産闘争を組織することができるし、婦人の福祉の問題も解決できる、婦人のさまざまな問題は婦人自身の手で解決していったというわけであります。つまり路線がかなめであって、これさえしっかりつかんでいくならば、婦人の福祉の問題というのは当然解決していけるということであります。

このほか農村の中に入って貧農、下層中農の教育を受けながら農村での路線闘争に参加した若い知識青年の婦人たちの話も何人か聞くことができましたけれども、文革を通じて、革命委員会、つまり各単位の指導部門にも婦人が大きく進出した。婦人の比率というのは非常に最近高まってきて文革のころには一〇パーセントぐらゐであつたものが、だいたい現在では三〇パーセントぐらゐにまでふえてきているということです。

つぎに政治学習についてのべますと、これはどこでも非常に盛んです。農村でも工場でも婦人はだいたい一週間に一、二日は政治学習に参加しております。長沙の刺繍工場の婦人たちは「国家と革命」を勉強していると言っておりますし、列車の公務員さんは毛沢東主席の論文と人民日報の社説を勉強している、あるいは

は上海の工場労働者は「ゴータ綱領批判」を勉強している。この人は六人の子供のお母さんですが、こういうふうなごく普通のおばさんたちが一生懸命マルクス主義を勉強しているわけです。しかもそれを単に頭の中の学問としてやるのではなくて、自分たちの実践と結びつけて学習している。こういうことはやはり非常にたいへんなことだと私は感じました。つまりかつて女は勉強する機会、あるいは文字さえ覚える機会がなかったわけで、そういうごく普通の婦人たちの中にこういう学習の非常な意欲が湧き起ってきているということです。

女は旧社会の中で非常に抑圧されてきたわけですが、それだけに素朴な階級的な感情を持っている。それをつまり路線の把握、あるいは政治的な自覚にまで高めていくということでこういう学習がやられているわけですが、「天の半分を支えている」女が変わるということが非常に大きな革命のエネルギーになっているんだということを強く感じました。

それからもう一つは、中国で社会主義的な家族というものはいったいどういふことになっているのか、あるいはどういふふうに変ろうとしているのかということに非常に関心を持って行つたわけです。つまり最近日本のリヴの中で、家というものの持つ意味というのが問われているわけですね。つまり国家というものが階級支配の道具であるとするれば、家というのは性差別の道具ではないかというふうな疑問というか、そういうものが出てきている。そういうこともあって、中国での家というものに非常に関心を持って行つたわけですが、現在の中国では家というのは厳然として存在しているといえると思います。このことは私にとっては実は

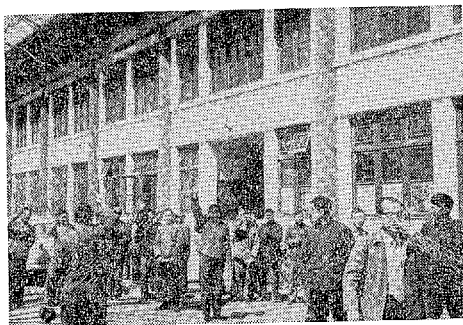
非常に意外なことでもありました。私はむしろ家というものの持っているさまざまな機能、たとえば家事労働なんかを可能なかぎり社会化していく、そして愛情を基礎としたような男女の関係だけがそこにのこっていくんではないかと思っていたわけですが、今の段階ではそういうことになっていない、たとえば、児童保育にしても、家庭保育が原則、保育所が従、国家による保育というのは補足的なものにすぎないというふうにはっきりとらえているようです。養老院もよほどのことがない限り入れない。いとはとこを頼ってでもできるだけ家族の中で扶養する。そういうことが老人をいたわる上で一番大切ということであって、もしそのために家族の負担がふえるということならば、それをたとえば街道委員会などが援助する。食堂も都市なんかでは非常に普及しておりますけれども、そういうものは基本には据えない。むしろやはり家でごく普通につくって食べるというふうなことが行なわれているようです。

それでは家事労働はいつたいうふうになるのかということですけれども、それはむしろ家族内における男女、あるいは家族の成員の平等な関係をつくり出していくことによってある程度問題を解決していくことができるんじゃないか。つまりいかに家事労働を社会化し機械化したところで、家族の中の人間関係が変わらないことには女は解放されないんだという考え方ですね。だからむしろ家というものを社会の最小の細胞として、家族ぐるみ社会主義化する、そして家族の中に正しい平等な関係、あるいは相互援助の関係を生み出していくならば、かりに家事労働を社会化できない部分があってもその問題はある程度解決していけるん

じゃないか。そういう家族ぐるみの社会主義化ということを考えているんじゃないかというふうに感じました。

それから家族のことに触れたついでに、計画出産にふれておきます。中国ではいま非常に計画出産が問題になっております。再建されつつある婦女組織の中でも一番問題になっているのはこの計画出産のことになりそうだと思うけれども、中国の場合の計画出産というのは単純な産児制限ではない。この間もエカフェの代表が報告していましたように、社会の計画的な生産の発展、それに見合った形で人間をふやしていくことであるわけですね。だから必ずしも制限ということではなくて、人口の非常に稀薄な地域とか、少数民族の中ではむしろいかにして人間をふやすかという問題も当然含まれているわけです。

しかしそれにしても全体として子たくさんであるということはもちろんあるわけで、産児制限というのが非常に問題になるわけです。上海の塘湾人民公社の衛生院で家族計画の非常に具体的な表が貼ってあって、それをうつしてまいりましたけれども、それによりますと、ここは人口が二万二千ぐらいの人民公社ですが、そこで去年の出生率がだいたい一パーセント程度ですね。二三百人です。八三パーセントのカップルが計画出産をやっていて、そのうち経口避妊薬によるものが一六パーセント、それから不妊手術によるもの、これが非常に多くて六〇パーセントぐらいある。この人民公社では六三年には四・七パーセント程度の人口出生率があったということです、それがほぼ一パーセントに押えられている。ピルのようなものを使うのが健康にいいかどうかということとはまた別の問題としてあると思いますけれども、ボーボーアル



北大訪問

などは、ピルの普及度というのは婦人の解放と非常に関係があると言うのですね。フランスでは七パーセントぐらいだそうだけれども、そういうのに比べると、中国の場合、この人民公社ではだいたい一六パーセント、それぐらい普及している。スノーの計算によりますと、中国で妊娠可能な婦人たちが約八千万とすると、ピルは一七〇億錠製造する必要があるそうですけれども、なかなかそれが追いつかないということです。

中国では、かつて非常な子だくさんであった、そして女というのはこどもを生む機械、こどもの中には女は入らないわけで、つまりは息子を生む機械でしかなかった。ところが、この計画出産は、そういう中国における女の座というものを急速に変えつつあるし、そのことがまた女の意識を大きく変えつつある、それは疑いえないというふうに感じました。

さてこういふふうに変化大革命というのは婦人解放における二つの路線というものを非常に明確にした、婦人にとっては非常に大きな思想的、政治的解放であったといえるのではないかと感じるところと私はあらためて感じてまいりました。いま中

国に行っても聞かれることは、毛沢東主席の「時代は変わった、男も女も同じだ。男の同志にできることは女の同志にも必ずできる」ということばです。そして女が解放されるかどうかというのは、プロレタリアートの解放全体にかかわる非常に重大な問題として社会全体が意識している。中国の婦人たちは社会の側からするその大きな期待に應えて、文革を経るなかで大きな飛躍を遂げようとしている。そういうことを私は非常に感動を持って見てまいりました。

# 中国側接待関係の方たち

## 広州

|        |                  |
|--------|------------------|
| 黄煥秋    | 中山大学革命委員会副主任     |
| 商承祚    | 〃 中文教授           |
| 蔣相沢    | 〃 歴史学教授（世界史）     |
| 駱宝善    | 〃 講師（中国近代史）      |
| 劉嶸     | 〃 哲学副教授          |
| 黄春生    | 〃 講師             |
| 江家超    | 広東師範学院哲学系教師      |
| 李鳴珂    | 広東省科学技術局革命委員会主任  |
| 張世高    | 広東省科学技術局外事組干部    |
| 吳秀強    | 〃 〃              |
| 黄業欽    | 〃 〃              |
| 馮今方    | 広東省科学技術局弁公室負責人   |
| 張容樞    | 広東迎賓館革命委員会副主任    |
| 朱勝南    | 〃 〃 干部           |
| 張盛豐    | 〃 〃 委員           |
| 麦林生    | 〃 接待組負責人         |
| 馮文志    | 国際旅行社広州分社革命小組負責人 |
| 劉樹森    | 国際旅行社広州分社訳員      |
| 李忠民    | 〃 〃              |
| 姜志新（通） | 広東省革命委員会外事組      |
| 長沙     | 〃                |
| 曹典礼    | 湖南師範学院史地系        |
| 張応徳    | 〃 師範学院中国語言文学系    |

## 北京

|     |                   |
|-----|-------------------|
| 唐道能 | 湖南師範学院政治教育系       |
| 高至善 | 湖南省博物館文物組長        |
| 龔固忠 | 韶山毛主席故居陳列館負責人     |
| 楊山  | 湖南省革命委員会外事組負責人    |
| 馮慶生 | 湖南省革命委員会外事組       |
| 吳石闕 | 〃 〃 （通訳）          |
| 廖日晷 | 韶山地区革命委員会接待弁公室負責人 |
| 方春蘭 | 韶山地区革命委員会接待弁公室講解員 |
| 王連竜 | 北京大学革命委員会主任       |
| 黄辛白 | 〃 革命委員会副主任        |
| 周路源 | 〃 革命委員会副主任        |
| 李家寬 | 〃 革命委員会常任委員       |
| 馮友蘭 | 〃 哲学系教授           |
| 陳岱孫 | 〃 経済系教授           |
| 周一良 | 〃 歴史系教授           |
| 張芝聯 | 〃 歴史系教授           |
| 陳慶華 | 〃 歴史系教授           |
| 宿白  | 〃 歴史系副教授（考古）      |
| 下立強 | 〃 東語系教員 日語教研室     |
| 湯一价 | 〃 哲学系教員           |
| 俞偉超 | 〃 歴史系教員           |
| 主任  | 〃                 |

## 科学院

|        |                        |
|--------|------------------------|
| 郭華榕    | 〃 歴史系教員                |
| 王長厚    | 〃 俄語系教員                |
| 李秀茹（女） | 〃 生物系教員                |
| 田余慶    | 〃 歴史系教授                |
| 倪孟雄    | 〃 外事組組長                |
| 趙恩普    | 〃 外事組干部                |
| 凌星光（通） | 〃 東語系教員                |
| 張光佩（通） | 〃 東語系教員                |
| 唐蘭     | 故宮博物院                  |
| 程万里    | 北京第一外語学院曲非系日語教研室主任 東語系 |
| 劉大年    | 歴史研究所第三所               |
| 黎澍     | 〃 〃                    |
| 潘純     | 〃 外事組                  |
| 蘇鳳林    | 〃 〃                    |
| 王仁泉    | 〃 〃                    |
| 李福徳    | 〃 中日友協                 |
| 西安     | 〃                      |
| 蘇貫之    | 西北大学校革委会副主任            |
| 王職     | 〃 革委会副主任・地質系助教         |
| 郭耦武    | 〃 歴史系革委会主任・教授          |
| 文暖根    | 〃 歴史系講師                |
| 高揚     | 〃 〃                    |

張揚 歷史系講師

張堂之 〃

林建民 〃

曾琪 助教

傅庚生 中文系教授

陳直 歷史系教授

蔣樹銘 講師

毛黎村(女) 助教

阮祁莘(女) 馬列主義教研室副主任

講師

何煉成 政治經濟學講師

李文祺(女) 外文教研室助教

朱潤寬 教務部副部長

王鉄民 辦公室副主任

席天恩 辦公室秘書

王陸原 陝西師範大學哲學副教授

袁仲一 陝西省文物管理委員會負責人

魯曼 陝西省外事組組長

鹿悅貴 陝西省外事組工作人員(通訊)

劉望民 陝西省外事組工作人員

### 延安

王金璋 延安革命委

高英杰 革命紀念館副館長

李忠全 革命紀念館研究員

李明智 外事組長

岳春壇(通) 外事組

### 洛陽

蔣若愚 文物管理委員會

溫玉成 龍門管理所長

范國欽 外事組副主任

劉耀先 外事組工作人員

段約鈺 秘書(外事組)

### 南京

葉春生 江蘇省教育局負責人

戈平 南京大學革命委員會副主任

王繩祖 南京大學歷史系教授

洪誠 中文系教授

胡耀明 政治系負責人

蔣瑣初 歷史系考古學講師

洪漢春 歷史系

趙瑞洪 中文系副教授

王友三 〃

茅家琦 〃

宋伯胤 南京博物院副研究員

郭玉彬 南京太平天國革命博物館

韓品峰 〃

龔如浩 江蘇省革命委員會外事辦公室接待組負責人

孫榮廷 江蘇省革命委員會外事辦公室工作人員

沈才元(通) 〃

蘇州

王義華 革命委員會外事組

詹小驥 革命委員會婦女干部

盧文保 革命委員會工作人員

衛昌明 〃

張學若 〃

### 上海

林學岱 上海師範大學歷史系教授

陳旭麗 歷史系副教授

唐金文 復旦大學革命委員會負責人

郭紹虞 中文系教授

劉大杰 中文系教授

全增嘏 哲學系教授

蔣學模 政治經濟系副教授

胡繩武 歷史系副教授

徐余麟 革命委員會辦公室負責人

王樂山 上海市革命委員會文教組負責人

鄒劍秋 教育局革命委員會副主任

李利 委員

周平(通) 〃

林起章 教育局辦公室

### 杭州

劉治源 杭州大學革命委員會副主任

徐曉華(女) 地理系負責人

沈鍊之 歷史系教授

沈善洪 政治系講師

任貫一 省外事辦公室副主任

忻志英(女) 省外事辦公室工作人員

## 周口店と西安

井上 清

今回、人文科学研究所の公的代表団に加えていただいて、去年九月の日中国交正常化のさいの両国政府共同声明の精神にのっとり、今後の両国の学術交流を発展させることを主要任務として訪中した私は、いままでの数回の訪中とは、またちがった種類の、強烈な印象を与えられた。それは、周口店と西安でうけたものに代表させることができる。

私たちが広州から長沙をへて、北京に着いたのは三月三〇日の夜の十時であった。ホテルへ着くと、思いがけなくも、京都の友人から送られてきていた手紙を受けとった。それには、大塚有章先生の私への伝言が書いてあった。それによれば、大塚先生たちが一九六二年に、関西のある代表団をひきいて訪中し、洛陽の龍門石窟を參觀したとき、この世界的に有名な石窟の仏像群の中で、もっとも芸術的歴史的価値の高い仏像の一つの首が、かき取られており、しかもそれがいま京都大学にあるというのを聞かされた、というのである。

私たちは出発前に、所員会の承認を得て、過去の日本帝國主義の中國侵略を反省する気持の一端をあらわすために、研究所に所蔵する『永樂大典』の原本の一冊を、そっくりそのまま精巧に複製して、中國に贈呈することにしていて、できることなら複製ではなくて原本そのものを御返したいのだが、篤志の方の御寄贈を受けて、いまはすでに京大の所蔵すなわち國有財産の一つとなっている貴重本を、人文研の一存ですぐ御返しすることでもないの、と、とりあえず精巧な複製を持参しようというのであった。このことが、ある新聞にのつたのを大塚先生が見られて、人文研にそういう気持があるならば、龍門の仏像のことも考えておかなければならないのではないか、と思われたのであらう。そのことを代表団の秘書長である私に伝えるために、先生はわざわざ私たちの出発のとき、伊丹空港に私をさがしに來られたが、すでに私たちは出国手続きをすませて、ゲートの中に入っていた。そこで、ある人に頼んで、手紙で北京の私に知らせてくれたのである。

この手紙を見て、私はまったく困惑しきった。さっき河野団長はじめみなさんにこのことを知らせた。この「京大」にある仏像とは、人文研に、ある人から寄託されているものであった。人文にそんな貴重な中國文化財があることを、私は全然知らなかった。所長である河野



团长も正確ないきさつを知らなかった。しかし東方部には、知っている人もあった。私たちが出発前に、こういうことをよく調べておかなくて、北京へ着いて、はじめに日本からの手紙で知ったということからして、まことにうかつ千万とも何ともいいようのない、恥かしいききみであった。この問題は、後日、洛陽を訪問し龍門を參觀したあとで、团长が挨拶の中でとりあげ、どういいうきさつで人文研におかれていたか、よく調査して中国がわに報告することにした。

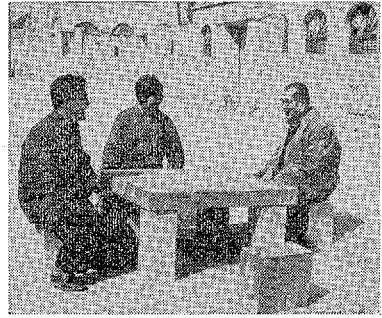
さて、北京到着早々に恥かしいことがあって数日後、四月五日、私たちは周口店を訪れた。これは、いまさういうまでもなく、一九二九年に全人類的な宝ともいうべき北京原人の頭蓋骨が発見された場所である。しかもその最初に発見された頭蓋骨は、一九三七年以来の日中戦争中に、行方不明になり、もしかしたら日本にもち去られたのではないかという疑惑がもたれている。一九四五年八月の日本敗戦後、中国から調査団が来日して、精力的に調査したが、依然として行方は分らず、日本にもってこられたことはないのではないかと、いちおうは推定されている。しかし、まだ確実な結論が出ているわけではない。

周口店では、中国解放後、いっそう大規模な発掘が、今にいたるまでつづけられており、多くのきわめて重要

な新発見がなされている。この參觀のさい、北京大学の古生物学教授呂遵鐸先生がみずから案内し、学問的な説明をしてくださった。呂先生は、二九年に最初の頭蓋骨を発見した斐文中先生の直弟子である。私たちは呂先生に、最初に発見された頭蓋骨の問題について、話してくださいるよう希望した。先生はすこしためられたが、思い切って話してくれた。その要旨は、私のメモおよび小野和子さんが随行せられた凌星光先生（北京大学日本語科教師）に後で、呂先生のいまの話は、こういうことではなかったかとたしかめられたメモをつきあわせると、つぎのとおりである。

「一九三七年、日本軍国主義は七・七事変をおこし、周口店附近一帯をも占領して、北京猿人の発見された龍骨山の向い側の山をも軍事拠点とし堡壘とした。そのために、北京原人の発掘作業は中止のやむなきにいたった。

七・七以前から、最初に発見の頭蓋骨は、北京市の協和医学院（アメリカ帝国主義がたて、管理運営していた医学院と病院）に置かれていたが、一九四一年一月八日、日本はアメリカとの戦争をはじめた。ただちに北京の日本軍は協和医学院をも占領し、北京原人の骨その他の周口店発掘物をさがし、研究室を荒らし、多くの化石等を破壊した。しかし原人の骨は発見されず、模型だけ



延 安 に て

が出てきたという。

一方、現地周口店の研究室も日本軍にじゅうりんされた。

それだけでなく、貴重な文化財を守ろうとした中国人労働者が、三人までも日本軍に虐殺された。さらに斐文中先生はじめ中国人の多数の考古学者が日本の憲兵隊に逮捕監禁され、頭蓋骨を出せと拷問にかけられた。

さらに、東京帝国大学教授高井冬二が周口店に来て、日本軍の保護のもとに、原人の発掘をやるうとした。これを知ったわが労働者たちは、洞を五、六メートルも土で埋めてしまった。また高井の発掘に協力しようとはしなかった。そのため高井は、仕事の量は多いのに、十分の労働者を得ることができず、彼の仕事はいつこうにはかどらなかつた。けっきょく彼は発掘をあきらめて東京に帰った。日本軍国主義が発掘をやめたのは、実は模型だけでなく原物を手に入れたからではないかという推測もある。

また一方、聞くところによれば、アメリカは協和病院

においてあった頭蓋骨を、アメリカに運ぼうとして軍艦を派遣したが、日本軍の真珠湾攻撃、日米開戦により、その軍艦は途中で爆沈されたともいう。

一九四五年、抗日戦争が勝利したのち、国民党政府は代表団を日本に送り、日本にもち去られていると推測される北京原人の骨の返還を要求したが、実物は見当らず、模型をさがし出すことができただけであつた。日本で発見できず、アメリカ政府も、アメリカには運んでいないといっているため、現在どこにいったのか不明である。最近、アメリカの友人、日本の友人が来て、頭蓋骨の行方をさがす手がかりを提供してくれた。われわれはそれが必ずかえってくることを信じている。」

斐文中先生らが日本軍に逮捕拷問されたことを話すと、呂先生は、つとめて平静をよそおわれてはいたが、その顔には痛憤の色がうかぶのをおさええないように見えた。周口店を守ろうとして、中国人労働者が殺されたり、学者が監禁拷問されたりしたということは、恥かしいことに、私はこれまで知らなかつた。帰国して樋口隆康氏の論文「沈黙の世界史」を読むと、北京原人の骨の行方不明のことをのべた一節の終りに、「それにしても日本軍の責任は重い」として、周口店の工作室をおそつた日本軍が、「二名」の工作員を銃剣で刺殺したというのをかんとんに書いてあつた。しかし斐文中氏が監

禁されたことにはふれていない。

周口店の事といい、龍門の石仏のことといい（これは、日本商人が中国の売国的商人と結託して「買い取った」ものらしく、少くとも日本軍隊が直接に掠奪したものである）、日本軍国主義の罪業の深さをあらためて思い知らされた。学者は、その人個人としてはたんに学問熱心であつたというだけで他意はなかつたとしても、日本帝国主義の中国侵略の一環の中にくみこまれ、帝国主義の庇護のもとに、その中国研究を進めていたという客観的な構造を反省せずにすませるわけにはいかない。

周口店が学術文化上の日中関係史の最暗黒の時代を典型的にあらわしているとするれば、西安は反対に、その最も輝かしい時代の集中的な表現である。西安、古の長安と日本の奈良、平安の都との関係、古代日本人が、いかに盛唐の文物をむさぼり学んだか、これらについて、いまさら私の感慨をのべるまでもない。西安郊外の青龍寺は空海が学んだ寺で、それ以後多くの日本人僧が留学した。その遺址はいまは青々とした麦畑であるが、ここにも、陝西省の文物保護委員会の標識があり、聞くところによれば近く発掘の予定もあるとのことである。上山さんだか福永さんだかは、ここで、古の青龍寺の屋根をおおうていた布目瓦の破片をひろっていたが、ここに立つて遠くに大雁塔を望みながら、往時を回想すると、日中

文化の關係の深き親密さが、しみじみと実感される。

現代中国の人は、最高級の指導者も、ふつうの労働者や農民も、みな一様に、日中両国は一衣帯水の隣国であり、両国人民は二千年の友好往來の伝統をもっている、ただ最近百年不幸な關係があつただけである。しかし、最近百年のことでも、日本の軍国主義支配者と日本人民とは、はっきり区別する、といわれる。私たちは、歴史においては、過去の二千年と最近の百年とは、たんに物理的時間としての長短で比べるべきものではなく、最近百年の歴史の重さは、それ以前の二千年にはるかにまざることを、よく知っている。軍国主義者と人民とを区別してくる中国人の友情に、私たちが真にこたえるただ一つの道は、かつての二千年の友好を、今後の永久の友好と結びつけることのみである。そうしてはじめて、最近百年は、日中友好の長い歴史の中のほんの一時の不幸であつたと、私たちもうことが出来るであらう。

去年九月の日中両国政府共同声明の諸条項とその精神が、すみやかに實際に具体化され、航空協定はじめ実務諸協定が一日も早く結ばれ、日中平和条約が結ばれる日を一日も早めるよう、私は私の持場で奮闘しなければならぬ。

## 道教一元論者の弁

福 永 光 司

私がこんどの中国旅行で、他の団員から道教一元論者をもって目され、「またかれの道教一元論が始まった」とからかわれ、「かれの道教一元論にはどうも」と眉をひそめさせるようになったのは、一ヶ月間の旅行も後半に近い西安・洛陽のあたりからであつたらうか。

「その目で見れば、すべてがそう見える」というのは、道家の文献『列子』に見える言葉であるが、かなしいかな平素から道教の文献しか読みかじっていない私には、見るもの聞くことすべて道教と結びつき、たまたま口を開けば、道教教的な発言となってしまう。

深圳の駅に着いて遠くにそびえる高山を見ると、「あの山は羅浮山ですか」とたずねて中国人をあっけにとらせ、広州の街を歩いて「偉大的導師、偉大的舵手、毛主席」の文字を目にとめると、道教の経典『海空智藏経』の「此の世間に大導師を得、大舟航を得たるを慶ぶ」の句を思い出したりする。

長沙の岳麓山で、岳麓の白鶴亭に案内され、山上の雲

麓宮址をたずねると、この山がその第七十二峯とよばれる南岳衡山の雄姿はいずこかと血まなこになり、毛沢東の生地韶山の村に泊って、舜の娘が仙女となって昇天したという韶峯の山頂を眺めると、若くして殉難した最初の夫人楊開慧を悼んで、「直ちに上る重霄の九なるに」と歌った毛沢東の「遊仙」の詞の発想を、ひそかにこの山のイメージと重ねあわせたりする。

さらにはまた、韶山の近くに七星岩とよぶ聚落のあることを知ると、清朝末期の革命的な秘密結社「三合会」の入会式に、関帝を忠義堂の一室に祭り、七星の劍を卓上に置く道教的な秘儀がおこなわれていたという平山周氏の実録を想起し、北京の頤和園をたずねて、宮殿の入口にかかけられた対聯の文句「星朗紫宸、明輝騰北斗。日臨黃道、暖景測南榮」、「上林万樹連西掖。北極諸星拱太微」などを読むと、道教の信仰が清朝末期まで根づく宮廷社会に残存していたことを確かめ、一方また延安の王家坪をたずねて、陝甘寧地区の労働模範、楊步浩老人が毛沢東主席はわれわれの「救星」とたたえるのを耳にすると、古代の中国における道教的な最高神「天皇大帝」がまた星の精気とされていた民間信仰をその皺だらけの善良な顔にじっと見つめたりする。

中国各地の名所旧跡をたずねて、そこに見られる道家的な字句や道教的な遺構に瞳を輝かすだけであれば、

私も他の団員たちから道教一元論者とまでは決めつけられなくてすんだであろう。しかし、現代中国の革命的な現実を『老子』の「余り有るを損して足らざるを補うは、天の道なり」の「道」の実現として理解しようとし、ないしは上記「三合会」の革命のスローガン「順天行道——天の道を順行する」を『老子』の「天の道」と連続的にとらえようとし、さらにはまた人民公社の自己完結的な封鎖性を『老子』の「小国」の理想と結びつけ、公社の一室にかかげられた人口調節・産児制限の実施表をその「寡民」の思想と結びつけようとするに至って、私に対する道教一元論者のそしりは、ゆるぎなく定着したようである。

もっとも、そのそしりを定着させる潜在的な要因が、ほかにも全く思いあたらないわけではない。いわゆる道教を狭く神仙の教の意に解し、その神仙のインスタントな実践を酒による羽化登仙と心得れば、広州に始まって広州に終る十数回のレセプションで、茅台酒、紹興酒、淳香酒、精二泉等々の乾杯、ないしは店頭酒、西鳳酒、宝豊大麴、洋河大麴等々の他酌独酌、これらの酒に一貫してインスタント神仙の筆頭格でありえたのは、ほかならぬこの私であった。もしかすると、私を道教一元論者とよぶことの真意は、酒でしか一元的に行動できぬ男ということにあったのかも知れないが、しかし、そうとば

かりは言いきれないふしもある。

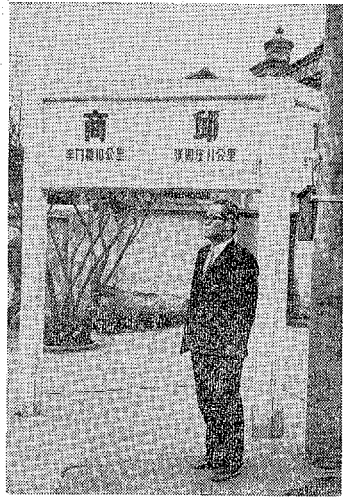
長沙でおこなわれた夜のレセプションの席上、私の近くには外事組の責任者某氏が座を占めていたが、アルコールもかなりまわったころ、私は彼にこう聞いてみた。

「マルクス・レーニン主義がこの国で絶対至上の真理とされていることはよく分るのですが、中国の古典にも、真理は独り歩きしない。それを実現させる担い手は人間である——苟非其人、道不虛行」とあります。真理の担い手が人間であるとすれば、その人間とは具体的には特定の風土と歴史のなかで生きる存在にほかなりませんが、だとすれば中国人によって実現されたマルクス・レーニン主義の普遍的な真理は、中国的な歴史的風土的独自性をごどこかにもつと考えてもいいのでしょうか。」

しかし宮本顕治にそっくりな顔をしていたその某氏は、言下に答えた。

「マルクス・レーニン主義は絶対普遍的な真理です。中国的な独自性など考えられません。」

北京大学では代表団員のそれぞれが講学〔学術報告〕をすることになり、私も「日本における中国哲学史研究の現状」と題して一時間あまり講学らしきものをおこなった。その内容は日本における専門学界の研究状況とその傾向性、わが人文研で私の主宰している共同研究班〔隋唐の思想と社会〕の班組織、研究方法などを主とし



莊子の生地・商邱の駅にて

たものであったが、そのおわりに私は日本人として中国の古代中世哲学史を研究することの意義と目的に言及し、それを二つの点で説明した。一つは日本の思想史を研究するために中国のそれが不可欠であること。いま一つは中国の「今」を正しく理解するためには、その「古」の研究が不可欠であることの二点である。私は後者の具体的な事例として、これまでの中国人が積極的に受け容れた外国の思想―仏教とマルクス・レーニン主義の二つをあげ、両者が思想としては全く異質でありながら、その担い手が同じ中国人であることを強調し、過去における仏教の受容は、それを媒体として甚だしく中国的な独自性を強くもつ道教もしくは中国仏教を生んだが、新しく受容されたマルクス・レーニン主義が、どのような中国的な独自性をもつか否かは、これからの問題であると言

葉を結んだ。

北京大学での私の講学は、このあとすぐ人民大会堂での郭沫若氏との接見に駆けつけなければならぬ時間の制約もあって、聴衆からの質問や批判を自由に聞く暇もなかったが、私の結びの言葉は、聴きかたによっては道教一元論のアナクロニズムと反撃される危険性を多分にもつ。

もともと道教という言葉には狭義と広義の二つの用法がある。狭義の用法では特定の儀礼と教理をそなえ、専門の道士と教団組織をもつそれをいうが、広義の用法では「道」ないし「天の道」の教をいい、狭義の道教は仏教を媒体としてそれを宗教化したものにはかならない。民族宗教としての道教という名称が用いられるようになるのは中国で五世紀以後のことであるが、それ以前には仏教も道教とよばれており、さらに古く『墨子』では古代聖王の教が道教とよばれている。私を道教一元論者と見たてた場合の道教というのは、おそらく民族宗教としての狭義のそれをさすものであろうが、もしそうだとすれば、道教一元論という言葉は私の知見の狭さをからかいあざける恰好の言葉ではありえても、わたくしの考える広義の道教一元論とはかなり性格の異なったものとなる。

私はむしろ宗教としての狭義の道教の根源にあるもの、

「老子」の言葉でいえば「天の道」の教を道教として考へるものであり、天の道とは道家ないしは道教、さらには儒家墨家を問わず、広く土着の民間信仰をも含めて、過去の中国人が思惟し認識したこの世界の究極根源の真理をよぶ言葉にほかならない。この天の道は道家で早く「公」とよばれているが、のちには儒家でも道を公とよぶようになり、毛沢東も「破私立公」の言葉が示すようにマルクス・レーニン主義の真理を「公」としてとらえている。

革命中国の偉大な「導師」毛沢東にとっては社会主義の真理も「公」としてとらえられ、天の道とはかつて秘密結社「三合会」がこの言葉を革命のスローガンとして使い、古くは四世紀の道家の思想家鮑敬言が、それにもとづいて君なく臣なき無政府主義の思想を展開させ、さらに古くはまた、老子が当時の支配階級の奢侈と腐敗を「盗夸」——ぬすつとのおごり——として痛罵し、余り有るを損して足らざるを補うことを説いた絶対普遍の真理であった（毛沢東もかつて北京大学に奉職していたころ、現在は老子学者として著名な当時の学生朱謙之としばしば討論し、このような無政府主義思想に魅せられていた時期があるという——エドガー・斯诺『中国の赤い星』）。中国の数千年間の歴史は、このような天の道の実現の努力を底流として根づきよまっているのであり、その意味

では、この国の永い歴史を道教一元論の立場から貫かせることも決して不可能ではあるまい。

わたくしはかねがね、人間の肉体に上半身と下半身があるように、思想にも上半身と下半身が考えられていいのではないかと思っている。上半身のいとなみは時代と地域とによってさまざまに変化するが、下半身のいとなみは素朴であり、鈍重であり、それほど大きくは変化しない。そして高度な思想はしばしば上半身でこなされるが、上半身だけでこなされた高度な思想は血戦の場における革命的な現実の力となりにくい。現代中国の輝かしい革命の成果も、その上半身のいとなみに目をむけるとともに、下半身のいとなみをじっくりと見すえる必要があるのではなからうか。私がこんどの旅行でもっとも感動した光景の一つは、中国の西北部の無数の巨龍がわだかまっているような黄土地帯の丘陵の谷間の田野で、黙々と鋤をふるい天を仰いでいる農民たちの姿であった。

訪中日誌

三月二四日—四月二五日

三月二四日 午前一一時三〇分、大阪(伊丹)空港発。午後二時三〇分、香港(九龍)空港着。ゴールデンゲート・ホテルへ。中文大学の何明氏の招きにより、彌敦酒店で夕食。

三月二五日 午前八時四〇分、九龍駅発。十時二〇分、羅湖駅着。下車して通関手続きをすませ、国境の橋をわたる。広東省科学技術局外事組の黄業欽氏と通訳の姜志新氏の出迎えをうけ、海関で昼食をすまた後、午後一時五分、深圳駅発。午後二時五〇分、広州駅着。駅頭に、北京大学を代表して私たちと終始行動を共にしてくれた李家寬(北京大学革命委員会常任委員)、趙恩普(北大外事組幹部)、凌星光(日本語科教員)の三氏のほか、広東省科学技術局の幹部の方々、中山大学および広東師範学院の先生方の出迎えをうける。ただちに宿舍の広東迎賓館に入り、午後四時から六時まで、蘭圃と鎮海楼(広州博物館)を参観、夜は

科学技術局主催のレセプション。

三月二六日 まず、毛主席ゆかりの農民運動講習所旧跡を訪れ、そのそばにある附属陳列館を見学。途中の街路に紫荊花が咲き乱れ、陳列館の前庭に巨大な木棉樹が真紅の花をつけていた。午後は広州博物館、広州起義烈士陵園、大榕寺を参観。夕食後、午後七時五〇分の列車で広州発。

三月二七日 午前八時、長沙駅着。湖南省革命委員会外事組の方々、湖南師範学院の先生方の出迎えをうけ、宿舍の湖南賓館へ。午前は毛主席が学生として学び教師として勤めた第一師範を見学、午後は岳麓山と橘子洲に遊ぶ。

三月二八日 午前八時に車で宿舍を出発して十時に韶山着。午前は毛主席の生家、午後は陳列館を見学。夜は宿舍の韶山招待所でレセプション。

三月二九日 長沙に戻り長沙時代の毛主席の旧跡、清水塘の旧居と湖南自修大学

(旧船山学社)を経て宿舍へ。午後は馬王堆におもむき、高至喜氏(湖南博物館文物組長)の説明をうける。帰りは烈士公園で下車、歩いて宿舍へ。夜、レセプション。

三月三〇日 訪中以来はじめての雨天。

午前一一時二〇分長沙空港発の飛行機で北京へ立つ予定のところ、雷雨のため南寧よりの飛行機の到着がおくれ、出発は午後に延期。午前は刺繍工場の見学、午後は李家寬氏より北京大学の教育革命にかんする話を伺う。午後六時五〇分、長沙空港発。午後一〇時、北京空港着。空港に、王連龍(北京大学革命委员会主任)、黄辛白(同副主任)、周培源(同副主任)らの諸氏をはじめとする北京大学の多数の先生方が出迎え城くださる。宿舍は北京飯店。

三月三一日 午前は故宮の青銅器館と瓷器館、午後は故宮で開催中の文革期間出土展を見学。終始、北京大学の宿白教授に懇切な御案内をいただき、青銅器館では高名な唐蘭教授に説明していただいた。夜は北京大学主催のレセプションがあり、席上、代表団側から北京大学へ贈る書籍の目録贈呈が行なわれた。

四月一日 午前九時に宿舍を出発。北京



郊外の柳並木の路を西北に走りつづけて、一〇時二〇分、八達嶺に到着。北京市内の小雨がここでは雪にかわる。それを冒して万里長城を見学。帰途、居庸関に立寄り、午後は定陵（明の万曆帝の墓）と長陵（永樂帝）を見学。

四月二日 北京大学へ。午前は、まず事務長格の李家寬氏より北京大学の教育改革の実情にかんする話があり、学内參觀をすませた後、學術交流にかんする代表团側の意見表明ならびに質疑。午後は、二時半から五つのグループ（中国哲学史、中国考古学、日本史、婦人解放史、西洋経済史）に分れて座談会。

四月三日 郊外を南へ向い、一〇時ころに北京市崇文区の五七幹部学校に到着。永定河流域の沙丘地帯の水田化に挑んでいる。昼食をよばれ、帰途、天壇公園へ。

四月四日 午前八時より十時半まで北京大学で四つの教室に分れて講学。（一）林屋「日中文化交流の歴史的考察」、井上「日本における近代、現代史研究の状況」、（二）島田「日本における中国近世近代思想研究の歴史と現状」、（三）福永「日本における中国哲学史研究の現状」、上山「哲学的観点

からみた日中學術交流の意義」。四林「奈良県高松塚壁画古墳の発見」。昼食は人民大会堂で郭沫若、廖承志両氏の招宴。午後、頤和園に遊び、夕食後、北京大学で、黃辛白氏（革命委員会副主任）より北大側の學術交流にかんする見解の発表。（これは二日に行なわれた当方の問題提起にたいする回答の形をとっている。双方の見解については島田氏の報告を参照されたい。）

四月五日 午前八時に宿舎を出発し、瀋陽橋のそばを通過して周口店へ。北京猿人の発掘現場と展覧館を參觀。午後は歴史博物館で新中国出土文物展の予展を參觀、夜は代表团主催のレセプション。

四月六日 午前八時、北京空港発。午前十時、西安空港着。空港に陝西省外事組の方々、西北大学、陝西師範大学の先生方が出迎えてくださる。空港から宿舍の人民大廈に向う途中、柳絮の降りしきるを見る。午後、八路軍弁事処と鐘樓を見学、夜は解放劇場で音楽歌舞を見る。

四月七日 午前中、大雁塔、青龍寺、興慶宮等の唐代遺跡を見学し、午後一時二十分の飛行機で西安を発ち、一時間後、延安着。しばらく休んで革命紀念館を見学、夜

は映画「紅灯記」を見る。

四月八月 延安時代の毛主席旧居を歴訪。午前は鳳凰山麓と楊家嶺、午後は棗園と王家坪。その間に唐代遺跡の宝塔山に立寄って延安市街を展望。夜、レセプション。

四月九日 三月以来はじめての雨とか。雨中、柳林人民公社の柳林生産大隊を見学。山頂にいたるリンゴ畑。雨のため予定よりややおくれて午後四時に延安空港を飛びたち、五時西安空港着。夜、外事組主催のレセプション。

四月一〇日 今日も雨。西安郊外を東に向い、まず滻河のはとりに半坡遺跡を訪れ、さらに東向して華清池に遊び、近くの始皇陵を見学。午後は、陝西省博物館を訪れ、夜は実験劇場で人形劇を見る。

四月十一日 濃濛たる朝靄のなかを西北に向って車を走らせること二時間、渭水を渡り、西漢の帝陵の密集する地域を通りぬけ、前方に丘陵を望む。唐の高宗と則天武后をはうむる乾陵である。まずその陪冢の一つである永泰公主墓の墓室を參觀、昼食後、乾陵をみる。未発掘のため墓室をみることはできないが、外見だけでもすばらしい偉容である。車はいったん往路をひきか

えした後、こんどは城外を南進し、玄奘の遺骨を納める興教寺に至る。眼前に終南山の靈姿あり。

四月一二日 午前は西北大学を訪問。教育革命の概要を伺った後、学内參觀、質疑応答。午後三時一〇分発の列車で西安をたち一〇時五〇分に洛陽につく。途中、華山をまじかに仰ぎ、斜陽のもとに黄河を望見。

四月一三日 午前八時四〇分、宿舎の洛陽友誼賓館を出発し、南行すること半時間あまり、九時二〇分に龍門につく。六朝から唐にかけての仏像の姿は、日本の飛鳥時代から奈良時代にかけての仏像に似通う点が多く、親近の情をそそのめるのだが、破壊の無惨さは眼をおおわしめる。案内は蔣若星（文物管理委員）と温玉成（龍門管理所長）の両氏。午後は、東方紅トラクター工場と合羣倉遺跡を見学、夜レセプション。

四月一四日 洛陽市労働人民公園内の出土文物陳列室と公園内に移築された西漢墓と東漢墓の墓室を見学、午前一一時三五分発の列車で洛陽をたち、南京にむかう。徐州のあたりで日没。

四月一五日 午前〇時五五分、南京着。戈平氏（南京大学革命委員会副主任）をば

じめとする南京大学の先生方、江蘇省革命委員会の方々の出迎えをうけ、宿舎の南京飯店へ。午前は長江大橋を參觀し、午後は紫金山の中山陵、靈谷塔、無樑殿、孝陵（明太祖の墓）を巡歴。夜、レセプション。

四月一六日 豪雨の中を雨花台の烈士墓に詣でて花輪を献じ、東王府跡の太平天国革命博物館と南京出土文物展を見学し、紫金山上の天文台を訪れる。午後は南京大学にて參觀および座談会。夕刻まで熱心な討論が行なわれた。

四月一七日 午前は南京博物院を見学し、午後一時一五分発の列車で南京をたち、午後五時四〇分蘇州に到着。レセプション。

四月一八日 虎丘、西園、寒山寺、午後は、網師園、刺繡研究所、拙政園を巡歴。午後五時三〇分発の列車で蘇州をたち、午後七時三〇分、上海につく。宿舎は黃浦江に臨む和平飯店。

四月一九日 午前は異型鋼管工場を訪れ、午後は塘灣人民公社を訪れ、新中国の工業と農業の一断面を学ぶ。夜、上海市教育局主催のレセプション。

四月二〇日 午前、魯迅居宅跡、中共一全大会旧跡を見学後、上海市第一百貨店で

買物。午後は上海博物館を參觀。小野、井上両団員は宿舎で婦人解放にいつての座談会。夜は北京劇場で「奇襲白虎団」をみる。

四月二一日 終日、復旦大学で參觀および座談会。午後七時三〇分発の列車で上海をたち、午後一〇時五〇分、杭州につく。杭州大学の先生方の出迎えをうけ、西湖のほとりの杭州飯店へ。

四月二二日 午前は、花圃、靈隱寺、玉泉、午後は、六和塔、梅家塢の茶園をめぐり、夜はレセプション。

四月二三日 午前は、雨中、織綿工場と吳山を訪れ、午後は、雨上りの西湖を船で遊覧。帰途、虎跑泉をみる。

四月二四日 午前九時、飛行機で杭州空港をたち、途中、南昌空港に立寄って、午後一時五〇分、広州空港着。ただちに、開催中の広州交易会の參觀。夜は、泮溪酒家代表団主催のレセプション。

四月二五日 午前七時二五分発の列車で広州をたち、九時二五分、深圳着。午後〇時一〇分羅湖駅発、一時五〇分九龍駅着。ゴールデンゲート・ホテルでしばらく休んだ後、午後四時五〇分、香港空港発。午後七時五〇分、大阪空港着。（上山春平記）

# 参 観 箇 処 一 覧

| 都 市    | 大 学  | 博 物 館   | 古 蹟   | 革 命 史 蹟  | そ の 他                                  |
|--------|------|---|---|--|--|
| 1. 広州  |      | 広州博物館   | 鎮海樓<br>六榕寺  | 農民運動講習所旧跡<br>広州起義烈士陵園                                    | 蘭圃<br>交易会                              |
| 2. 長沙  |      |   | 岳麓山<br>橘子洲<br>馬王堆   | 湖南第一師範<br>韶山毛主席生家<br>韶山陳列館<br>清水塘毛主席旧居<br>湖南自修大学<br>烈士公園 | 湘繡廠                                    |
| 3. 北京  | 北京大学 | 故宮博物院<br>青銅器館<br>瓷器館<br>歴史博物館<br>(新中国出土文物<br>展覧会予展) | 故宮<br>八達嶺, 居庸関,<br>明十三陵(定陵,<br>長陵)天壇公園,<br>周口店                  |  | 五七幹部学校<br>(北京市崇文区)                     |
| 4. 西安  | 西北大学 | 半坡博物館<br>陝西省博物館                                     | 鐘樓, 大雁塔,<br>青竜寺跡, 興慶<br>公園, 華清池,<br>始皇陵, 永泰公<br>主墓, 乾陵, 興<br>教寺 | 八路軍弁事処   | 解放劇場<br>(音楽歌舞鑑賞)<br>実験劇場<br>(人形劇鑑賞)    |
| 5. 延安  |      |   | 宝塔山   | 延安革命紀念館<br>鳳凰山麓<br>楊家嶺<br>棗園, 王家坪                        | 映画“紅灯記”<br>鑑賞<br>柳林生座大隊                |
| 6. 洛陽  |      | 洛陽市出土文物<br>展覧陳列室                                    | 竜門石窟<br>含嘉倉遺跡<br>漢墓(労働人民<br>公園内)                                |  | トラクター製造<br>廠                           |
| 7. 南京  | 南京大学 | 太平天国革命博<br>物館<br>南京市博物館<br>南京博物院                    | 靈谷塔<br>無樑殿<br>明孝陵   | 中山陵<br>廖仲愷墓<br>雨花台烈士墓                                    | 長江大橋<br>動物園<br>紫金山天文台                  |
| 8. 蘇州  |      |   | 虎丘(雲巖寺)<br>西園(戒幢律寺)<br>寒山寺, 網師園,<br>拙政園                         |  | 刺繡研究所                                  |
| 9. 上海  | 復旦大学 | 上海博物館   |   | 魯迅居宅<br>中国共産党一全大<br>会旧址                                  | 異型鋼管廠<br>塘湾人民公社<br>北京劇場(“奇襲<br>白虎団”鑑賞) |
| 10. 杭州 |      |   | 靈隠寺<br>玉 泉<br>六和塔<br>呉 山<br>虎跑泉(定慧寺)                            |  | 花圃<br>梅家塢生座大隊<br>杭州織綿工廠<br>西湖遊覧        |
| (計) 90 | 4    | 10  | 37  | 19   | 20                                     |